

一本松町文化財調査報告書 1

愛媛県南宇和郡一本松町中川

茶堂II遺跡発掘調査報告書

—国道56号線局部改良工事に伴う発掘調査—

1994

一本松町教育委員会

一本松町文化財調査報告書 1

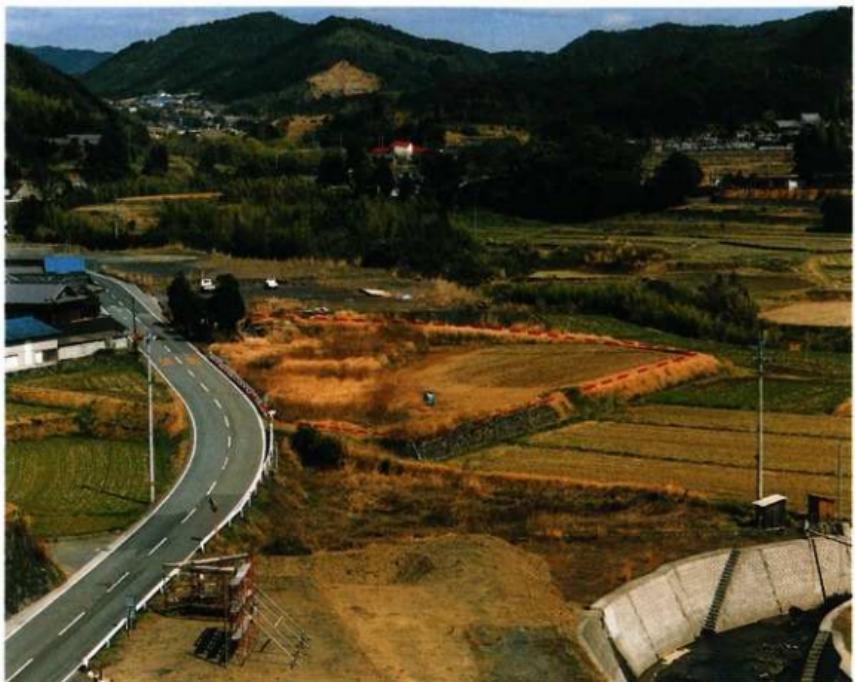
愛媛県南宇和郡一本松町中川
茶堂II遺跡発掘調査報告書

—国道56号線局部改良工事に伴う発掘調査—

1994

一本松町教育委員会

卷頭図版



中川茶堂II遺跡遠景（西面より）

序

一本松町は、愛媛県の南端、南宇和郡の東部に位置し、北は国立公園篠山を隔てて北宇和郡津島町に、東は篠川を対して高知県宿毛市、南西に足摺宇和海国立公園の近い起伏に富んだ中山間地帯で、自然環境に恵まれ、四季の移り変りと共に、ゆるやかな時間の流れの中で、昔ながらの農山村の風景を残しています。

本町は、各地区に伝わる伝統文化や、各種行事を始め、多くの文化遺産を保有していますが、その中でも未調査ながら埋蔵文化財としての土器、石器類は町内各所より発見採集され、近隣の平城貝塚、宿毛貝塚と共に、遠く先祖の縄文人が住んでいたことを物語っています。

いにしえの時代に、自然の力と自らの足で行なわれた、交流、交通の手段も、時の流れと共に大きく変化してきました。愛媛県松山市と高知県高知市を豊後水道沿岸を通り、太平洋に沿って現在の交流、交通の大動脈として走る国道56号線は、着々と改良工事が進んでいます。

本報告書は、満倉から中川までの3.2kmの局部改良工事による緊急発掘調査をまとめたものです。この茶堂II遺跡は昭和41年の発見以来、その重要性が問われたにもかかわらず、現在までの間、未調査の遺跡でした。今回建設省の御支援を得て、多方面の方々のご指導を賜わりながら、発掘調査を担当いたしました。

茶堂II遺跡は、長年、耕作地として利用されており、文化層等にかなりの攪乱を受けていて、出土遺物も小さく碎片されていましたが、住居址が発見されたことは、今回の調査で大きな収穫となりました。これらの資料は、本町の他の埋蔵物包蔵地の調査に貴重なものとなり、収録されたこの報告書が、様々な場で皆様の助力となり、広く活用され、少しでも埋蔵文化財に対する意識の高揚や、ご理解に役立つ事が出来ればと願うものであります。

遠い昔の文化繁栄を垣間見ながら、古き歴史に誇りを持ち、文化の保護、保存に努め、地域の活性化に生かしていくことを存じます。

本調査に当り、調査主任として現場でご指導いただいた宇和島市在住の犬飼徹夫氏をはじめ、発掘、遺物の整理等にご尽力いただいた調査員の方々や、発掘に従事して下さった調査補助員、作業員の皆様、又関係各機関より多大のご協力、ご支援を賜わりましたことに対しまして、ここに厚くお礼申し上げます。

平成6年6月

一本松町教育委員会
教育長 民家史郎

例　　言

1. 本報告書は愛媛県南宇和郡一本松町国道56号局部改良工事に伴って発掘調査を実施し、その調査結果を、茶堂II遺跡発掘調査報告書としてまとめたものである。遺跡の所在地は、愛媛県南宇和郡一本松町中川1792番地2-3、793番地で、発掘対象面積は1,344m²である。
2. 発掘調査の体制は、次の通りである。

調査主体 一本松教育委員会
調査依頼者 建設省大洲工事事務所
調査組織 第1章2「調査組織」に記載する。
3. この調査にあたっては、下記の方々に特別のご協力、ご教示にあずかった。(敬称略)

間壁忠彦(倉敷考古館長) 平井 勝(岡山県古代吉備文化財センター) 阿部芳郎(岡山大学) 株式会社 羽田建設 有限会社 南予花木園
4. 本書の作成にあたっては、遺物整理、遺構のまとめは主に犬飼徹夫、猪石広明、中岡修也が分担した。写真撮影・編集は、中岡修也、池田力が担当した。執筆者名は文末に()記載した。
5. 本遺跡でのテフラの確認、及び古植生の花粉分析、植物珪酸体分析の実施を、株式会社パリノ・サーヴェイ(東京都中央区日本橋室町2-1-1)に依頼した。その玉稿を第5章のまとめ(総括的所見)に記載することとした。
6. 本報告書で使用した地図は、国土地理院発行5万分の1地形図「宿毛」を複製使用した。
7. 本調査で検出した遺物は、すべて一本松町郷土資料館に陳列し一般に公開している。

本文目次

卷頭図版 中川茶堂II遺跡遠景

序

例　　言

第1章　調査のあらましと環境	1～9
1　調査に至るまでの経緯	1
2　調査組織	1～2
3　遺跡の環境と周辺の遺跡	3～6
4　発掘調査の経過	7～9
第2章　調査の概要	10～12
1　遺跡の概要	10
2　発掘調査区の設定	10～12
3　調査方法	11
第3章　検出された遺物・遺構	13～23
1　遺跡の堆積層序	13～14
2　遺物・遺構の出土状況	15～23
1) 円形竪穴住居址	18～19
2) 柱　　穴	20
3) 土坑状遺構	22～23
4) 集　　石	22～23
5) 配石遺構	23
第4章　出土遺物	24～40
1　縄文土器	24～26
1) 縄文前期土器	24
2) 縄文中期の土器	24～25
3) 縄文後期土器	26
2　石　　器	32
1) 石　　鉋	33
2) 石　　錐	35
3) 敗　　石	35
4) 打製石斧	35
5) 石斧状石器	35
6) スクレイパー	35
第5章　まとめ（総括的所見）	41～49
1　自然科学分析	41～46

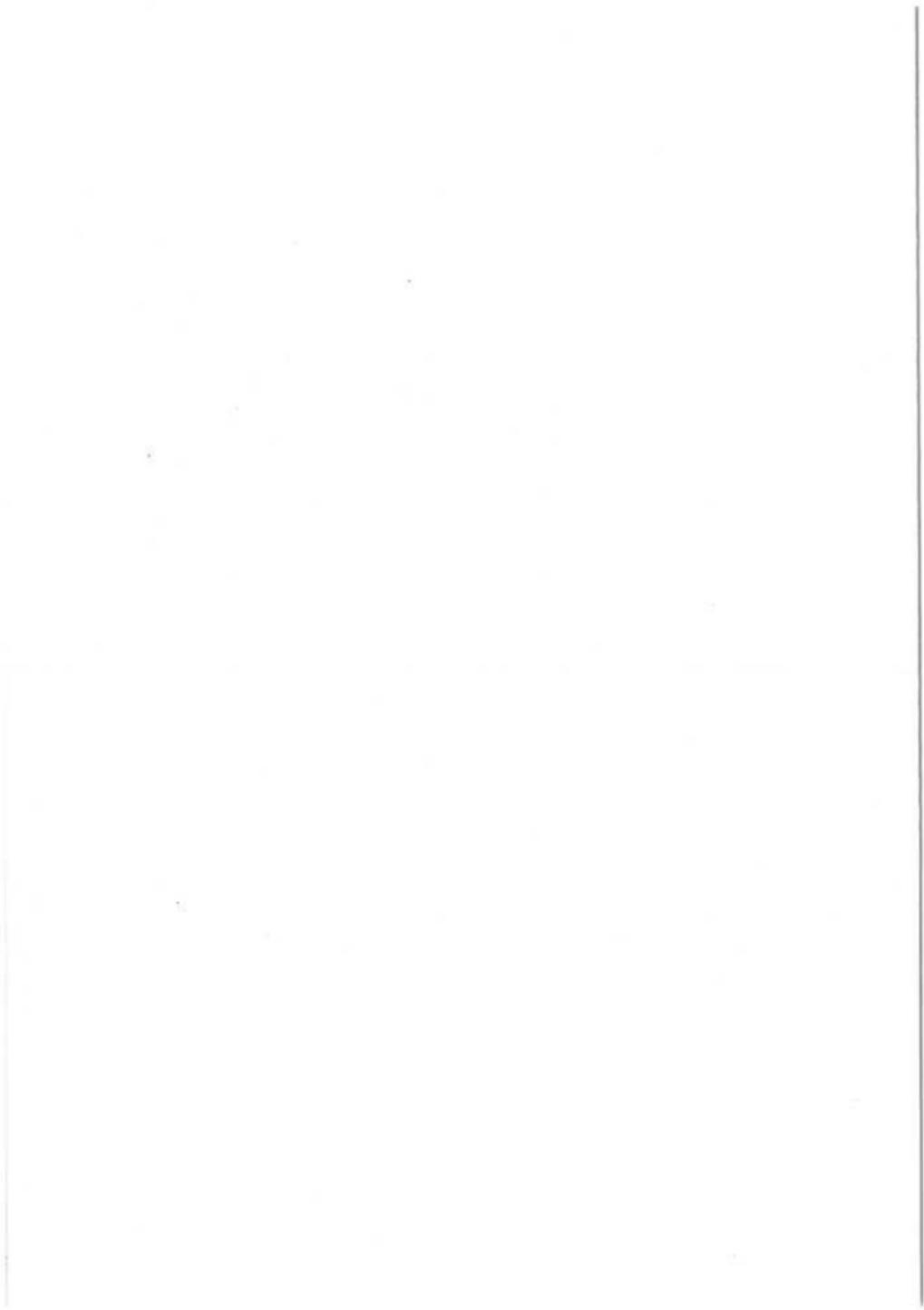
1) 層序と試料	41
2) 分析方法	42
3) 微化石の産状	42~43
4) 遺跡周辺の古植生	43~44
5) 植物珪酸体・花粉分析プレパラートの状況写真	45
2 遺構・遺物に関する若干の補説	47~49

挿 図 目 次

挿図 1 茶堂II遺跡周辺の旧石器・縄文遺跡	2
地図 1 周辺の遺跡分布図	3
挿図 2 発掘調査以前の採取遺物	6
挿図 3 調査区設定図（A～C）	11
挿図 4 調査区設定図（D区）	12
挿図 5 D 5 区堆積層序	13
挿図 6 B 3 区配石遺構	15
挿図 7 D 5 区集石遺構	16
挿図 8 D 1 区集石・2・3・4	17
挿図 9 円形堅穴住居址	19
挿図10 D 4 区第4層の柱穴と遺物	20
挿図11 D 4 区第5層上面の出土状況	21
挿図12 D 区土坑状遺構と遺物	22
挿図13 D 区出土土器 1	27
挿図14 D 区出土土器 2	28
挿図15 D 区出土土器 3	29
挿図16 D 区出土土器 4	30
挿図17 D 区出土土器 5	31
挿図18 採集遺物石材別グラフ	32
挿図19 出土石鎌	34
挿図20 出土石錐	36
挿図21 出土敲石	37
挿図22 出土打製石斧・石斧状石器	38
挿図23 出土スクレイパー	39
挿図24 出土石器一覧表	40
挿図25 宿毛貝塚出土の宿毛C式土器	48

図版目次

図版 1	発掘状況	50
図版 2	C-4区集謫	50
図版 3	D-2区出土のバミス（軽石）と土器	51
図版 4	D区の発掘状況	51
図版 5	D-1区石鐵の出土状況	52
図版 6	D-1区西側の柱穴	52
図版 7	D区（792番地2）発掘完了	53
図版 8	調査団の方々	53
図版 9	D-5区推積層序	54
図版10	D-5区推積層序（部分）	55
図版11	堅穴式住居址	55
図版12	D区出土土器写真1	56
図版13	D区出土土器写真2	57
図版14	D区出土土器写真3	58
図版15	D区出土土器写真4	59
図版16	石鐵	60
図版17	姫島産黒曜石片	61
図版18	姫島産黒曜石片、貢岩剥片	62
図版19	打製石斧等、スクレイバー	63
図版20	石錐・敲石	64
図版21	敲石・スクレイバー	65
図版22	加工痕有剥片	66
図版23	剥片、樹木片	67
図版24	台石、姫島産黒曜石片	68
図版25	姫島産黒曜石片	69
図版26	台石など	70
報告書抄録		71



第1章 調査のあらましと環境

1. 調査に至るまでの経緯

今次の緊急発掘調査は、建設省による「平成5年度一般国道56号一本松町局部改良工事」の一部が、從来から周知されていた茶堂II遺跡の主要部分を対象とするものであったことに端を発する。国道56号局部改良部分は、中川隧道を避ける形で、全長3.2km、幅員11m(35,200m²、構梁部分も含む)にわたるものであったが、このうちの1,344m²(一本松町中川792番地2~3、793番地)が、茶堂II遺跡部分とされ、今回の発掘区域の対象となった。茶堂II遺跡の全体の面積は3,536m²(792番地1~3、793番地)にわたるものと予察されていることから、今回の発掘区域は、茶堂遺跡区域のはば半分程度にあたるものである。

さて茶堂II遺跡は、一本松町の南部を縫うように蛇行し、下流部で惣川と合流し深浦港へと注ぐ赤木川の北側、小規模な河岸段丘上に立地する。良好な立地に恵まれていることから先史遺跡の所在が探索されている中で、昭和41年(1966)城辺町在住の猪石広明氏により、縄文期の遺物が採集された。以後、数次にわたる遺物採集、さらに高知県中村市在住の木村剛朗氏による採集等を合わせ、縄文前期の轟式土器、田井式土器、縄文中期の船元式土器に準じる土器片の外、後期の平城式土器、姫島産黒曜石製の石鏃、サヌカイト製の縦形石匙、チャート製の石鍬、重量145gもの姫島産黒曜石塊などが採集され、本遺跡の重要性が高まってきた。(採集品の大部分は、一本松町郷土資料館に所蔵)これらを受け、『愛媛県史・資料編考古』(1986)P.135に、県下の重要な縄文遺物として紹介されている、参考図として、これを挿図2に図示する。

以上の経緯の中で、今次の国道局部改良工事が持ち上がったが、この事業が、極端に迂回する国道や、幅員拡大が不可能な中川隧道区を避けての道路改良であり、地元住民の強い要望のもとに進められるものだけに、平成5年6月1日町文化財保護審議委員、町教育委員会合同の連絡会を持ち、記録保存の途を図ることになった。

ひきつづき、建設省の委託のもとに、調査主体を一本松町教育委員会とし、調査組織団の結成、調査方法、トレーンチ設定等の計画を立て、調査に移った。

2. 調査組織

今次の発掘調査は、下記の組織によって行われた。

調査団長 民家 史郎(一本松町教育委員会教育長)

調査副団長 狩野喜三郎(一本松町文化財保護審議委員会委員長)

調査指導員 森 光晴(愛媛考古学協会副会長)

犬飼 徹夫(日本考古学協会会員)

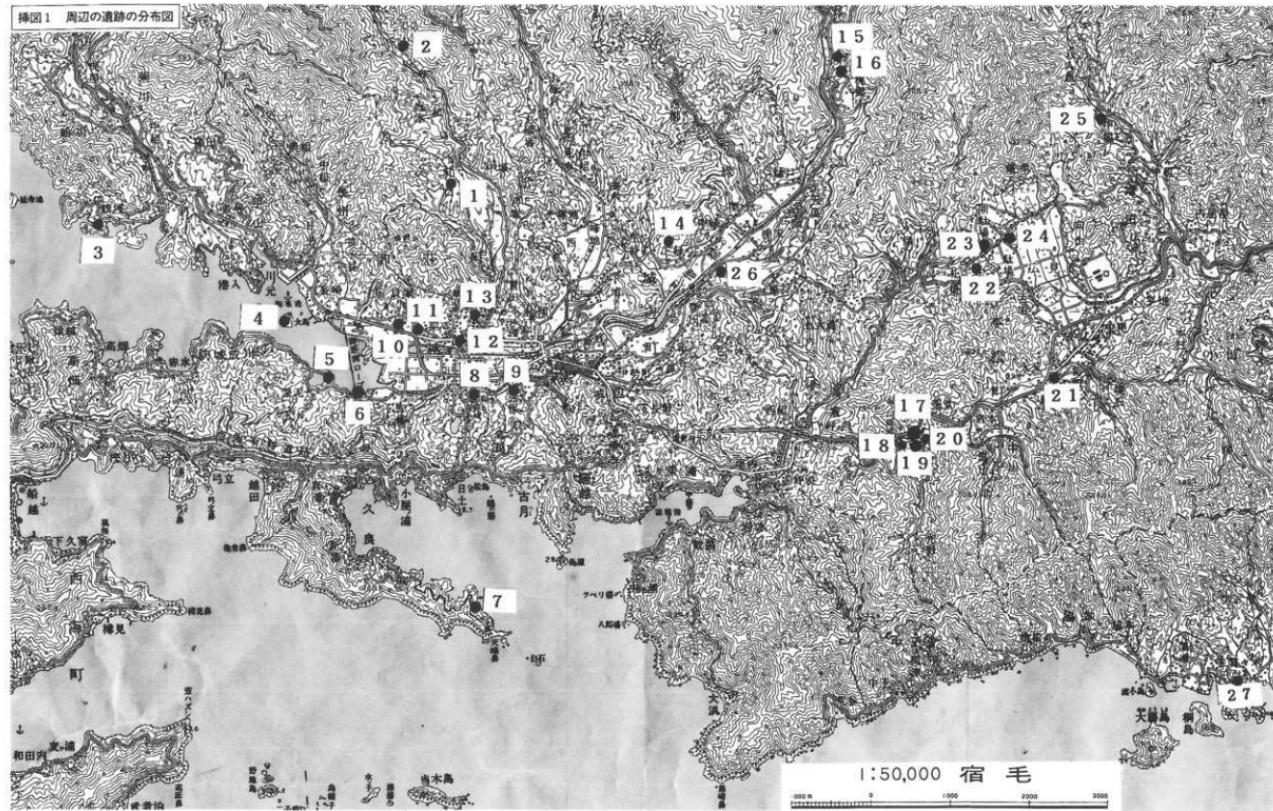
木村 剛朗（日本考古学協会員）
 中間 修也（愛媛考古学協会理事）
調査員 猪石 広明（日本考古学会員）
 間口 昭三（愛媛県文化財保護指導員）
藤田 儒三（御在町文化財保護審議委員）
調査補助員 尾崎 昭夫 佐久間義正 井村 博康 山本 照重 谷門 弘資
(町文化財保護委員)
 尾崎 城一
作業員 大西 直江 増岡カツミ 池田タマエ 中谷イトエ 清家美津代
 中西 和子 和泉キミエ 橋岡タマエ 中西 和美
事務局 山本 光春（一本松町教育委員会社会教育課長）
 池田 力（ // 主査）
調査協力団体 建設省大洲工事事務所 煙羽田建設 (有)南予花木園

3. 遺跡の環境と周辺の遺跡

挿図1 茶堂II遺跡周辺の旧石器・縄文遺跡

番号	遺跡名	主要遺物	番号	遺跡名	主要遺物
1	和 口	国府型ナイフ形石器・翼状剣片、石核（旧石器）	15	アナガイチ	縄文土器（前）、姫島黒曜石片
2	坂 本	翼状剣片、尖頭器（旧石器）	16	梶郷駄場	縄文土器（早・前）姫島黒曜石片 磨製石斧、石鎌
3	銭 坪	縄文土器（後）石鏃、姫島黒曜石片	17	茶 堂 II	縄文土器（前・中・後）、石斧、石鏃、姫島黒曜石片
4	大 島	縄文土器（後）石鏃、姫島黒曜石片	18	躑 駄場 II	縄文土器（中・後）、十字形石器
5	深 泥	国府型ナイフ形石器（旧石器） 縄文土器（早・前・中・後）局部磨製石斧	19	躑 駄場 I	縄文土器（晩）、石斧、石鎌
6	仙 磬 鼻	石斧、姫島黒曜石片	20	茶 堂 I	縄文土器（後）、姫島黒曜石片
7	天 磬 鼻	縄文土器（後）、姫島黒曜石片	21	大 又	縄文土器（後・晩）、姫島黒曜石片
8	節 崎	縄文土器（後）、姫島黒曜石片	22	札 掛	縄文土器（後）、石鎌
9	久 保	縄文土器（後）	23	岡 駄場	縄文土器（後）、姫島黒曜石片
10	貝 塚	縄文土器（後）、貝層	24	広 見	縄文土器（前・後・晩） 石鏃、姫島黒曜石片
11	八 幡 野	縄文土器（後）、姫島黒曜石片	25	中 屋	ナイフ形石器（旧石器） 縄文土器（早）、石鏃、石斧
12	平 城 貝 塚	縄文土器（早・前・中・後・晩） 骨角器、貝層、人骨	26	縁 当 時	局部磨製石器
13	法 華 寺	縄文土器（晩）	27	宇 須 々 木	ナイフ形石器（旧石器）
14	下 縁	縄文土器（後）姫島黒曜石片			

図1 周辺の遺跡の分布図



本遺跡は、愛媛県南宇和郡一本松町中川に所在する。絶対位置東経132度37分57秒、北緯32度56分40秒を測る本遺跡周辺は、西日本における縄文遺跡の密集地帯のひとつに挙げられている。

やや巨視的に広げたこの地域の地形区分は、一本松町の北部を占める篠山山系、その南部を海岸線に沿って東西方向に走向する中位の高度を持つ大平山山系からなる山地区。船越半島を中心とし、発達した海食崖・海食棚、やや奥行きを持つ海食洞で表現される海岸区。それらに挟まれた形の城辺低地、一本松盆地及びその周縁に広く発達した海拔10~130m程度の砂礫台地からの低地区に区分される。

篠山山系は、高月山(1,229m)、譲ヶ葉山(1,066m)と続く南北系の地波と、由良半島、観音岳(779m)とをつなぐ東西主稜がまさに直交する形で形成され、郡内最大級の大起伏山地で、標高1,065mを測るが、本図幅(第1図)では、その南側斜面のほんの一部しか図示し得ないところとなっている。その山地斜面には、広く暖地性の混合林がみられ、河谷ぞいの農業集落も点在する。山地斜面末端部では、縄文前期轟式土器及び姫島産黒曜石片が採集されたアナガイチ遺跡(15)、櫛鱗駄場遺跡(16)などが挙げられ、本町でもこの図幅に図示し得なかったが、北部の正木地区大駄場遺跡⁽¹⁾では、翼状剝片、翼状剝片石核が採集され旧石器遺跡としての性格を持つものである。また中屋遺跡(25)でも、縄文早期土器、ナイフ型石器が採集されている。

一本松盆地の南方を東西方向に走向する中位級の山地列をなす大平山山地は、大浜東方の山(358m)、大平山(393m)、新城山(303m・高知県分)を結ぶ主稜線の南側及び西側は断層崖起源の直線的な岩石海岸を形成するが、そのわずかに開けた小浜堤の字須々木遺跡(27)からは、チャート製切出型ナイフ形石器(宮田山文化期)が採集されている。すでに著名な宿毛貝塚は、本遺跡の東方、直線距離7kmを測るところとなる。

さて、姫島産黒曜石、頁岩等からなる多量の石鉄、縄文前期彦崎乙I式土器から晩期突帯文土器にいたる連綿とした遺跡相を持つ広見遺跡(24)、また岡駄場遺跡(23)札掛遺跡(22)等が所在する一本松盆地は、西日本外帯を形成した東西方向の中央構造線の地殻昇降運動の後、二次的な上昇波たる前述の南北系、金山-高月山-篠山の上昇波の影響を受けた豊後水道に沿っての西落ちの逆傾斜運動の基準軸の位置を占めている。ために、局地的な侵食基準面の一時的な安定が保たれ、補償埋積面が形成され、流量に不相応な平坦面が保持されたものと考えられている。この様相は、南北系小地波の西斜面に属した河川上流部たる宇和盆地、三間盆地の地形相と揆を一にする。この一本松の低位地形区は、第四系の体積物が良好に保存され、後述する城辺低地での上位砂礫台面に相当する古い平坦面(標高100m程度)が、まだかなりまとまった形で残っている。旧石器・縄文遺跡は、この上位砂礫台面上に広がっている。

本遺跡は、比較的緩く傾いた大平山山地北側斜面に水源を持つ赤木川水系の中流部に位置

する。この河川の中流域は緩かに西傾した一本松盆地西縁に沿って流出し、海拔30~40m、40~90m程度に狭小ながら河床安定面が残り、局地的に沖積層を載せている。その沖積面の先端、赤木川に臨んで本遺跡は立地している。

同様な形成歴を持つ北側の惣川は、一本松盆地での上大道一札掛間の上位砂礫台地面を断ち切り、その曲型的V字谷の底にはみるべき低地は存在せず、遺跡の発見は報じられていない。赤木川は下流域において、惣川同様の穿入形相を呈するが、わずかに湾頭沖積地（勾配3/1,000m）を持つ満倉あたりで惣川と合流し深浦港へと流れる。

行政区を異にするが、隣接する城辺低地及び半島部の形相と、そこに散在する遺跡群にも、簡単に触れておきたい。城辺低地は、ほぼその全域が僧都川水系による第四紀堆積物の分布範囲である。河口から約3kmのぼった城辺町市街地での勾配は3/1,000m程度であるが、その上流では8/1,000m、北方の支流筋では12/1,000m、30/1,000mと急増する。ために河床勾配が急に緩くなる城辺一中谷周辺には自然堤防の微高地が発達し、南側山麓を流れる蓮乗寺川付近がその後背湿地となる。この周辺では、繩文後期の西平式系土器、御領式系土器の散在が伝えられるが、まとまった遺跡の確認は現在までに報じられていない。遺跡は河口周辺に広がる。その生活基盤は、狩猟のほか、汽水性の魚貝類を対象とし、内湾性漁撈、外湾性漁撈を加えたものであったことが知られ、古く明治年間、寺石正路によって報じられた平城貝塚（12）、姫島産黒曜石の原石が採集された節崎遺跡（8）、その石材搬入の拠点遺跡と目され、国府型ナイフ形石器、繩文早・前・中・後期にわたる繩文土器が採集された深泥遺跡（5）など著名な遺跡が連なっている。また僧都川下流北岸に広がる下位砂礫台地（標高5~20m）上にも遺跡が散在し（11・13）将来の本格的調査が望まれている。

一方、僧都川を眼下に望む中位砂礫台地（25~40m）及び上位砂礫台地（45~80m）上にも良好な遺跡が存在する（14・26）。これらはほとんど浸食により「丘頂平坦面」の形状を呈するが、日照に恵まれ、台面下の河川、湧水の便が図られれば良好な遺跡立地の形相を持つ。

半島部は、複雑な海岸線の出入りが特徴的で、独特の沈水型半島をなす。その岬部分に天嶋鼻遺跡（7）が所在する。その規模、性格の究明とともに、湧水に恵まれた同様の立地を持つ遺跡の探索が将来に待たれている。

（犬飼 徹夫）

- ① 吉本 拡『梶郷駄場遺跡調査報告書』 愛媛県教委 1983
 - ② 猪石広明『愛媛県一本松町大駄場の先土器時代遺物』『愛媛考古学11号』 1989
 - ③ 山口将仁『〈土佐の考古学〉高知県における後期旧石器時代の形相』『旧石器時代41』 1990
 - ④ 鎌木・西田『伊予平城貝塚』 御荘町教委 1957
- 木村剛朗『平城貝塚第IV次発掘調査報告書』 御荘町教委 1982
犬飼徹夫『平城貝塚の再評価』『考古学ジャーナル129』 1976

挿図2 発掘調査以前の採集遺物



4. 発掘調査の経過

平成5年6月1日(火) 犬飼調査指導員、中岡、猪石、間口調査員が来町し、一本松町側より、文化財保護審議委員の尾崎(昭)、佐久間、井村、の調査補助員を交えて事前打合会を持つ。事務局員の山本、池田のまとめた資料を確認し、調査現場において建設省側と合議する。終了後、調査場所の範囲確認及びトレント設定計画を立てる。

6月2日(水) 犬飼、森、木村の調査指導員、中岡、猪石、間口を交えて、中川、茶堂II遺跡発掘調査の全体計画を確認し、全面発掘の体制を整える。

6月3日(木) 犬飼、森調査指導員、中岡、猪石、間口、藤田調査員、他4名。

793番地に、 $6\text{m} \times 4\text{m}$ のトレント、792-3番地に $2\text{m} \times 10\text{m}$ のトレントを、それぞれ東西に設定する。同場所に全面を $4\text{m} \times 4\text{m}$ にグリットを設ける。793番地に13グリットを設定して、明日からの作業開始に備える。

6月4日(金) 犬飼、森、中岡、猪石、間口、藤田、他3名。

まず全体打合会を持つ。調査の進め方、発掘調査の方法、留意点を調査指導員より説明を受け、実地指導後に調査活動に移る。1グリット分担を2~4名程度として作業を開始する。作業終了後、県に対する調査申請と町の行事の関係で調査を暫時中断する旨の連絡あり。

9月2日(木) 犬飼、中岡、猪石、間口他9名。

調査打合会を開き作業を再開する。A-1~A3グリットの3班で掘り進める。

9月6日(月) 犬飼、中岡、猪石、間口、他8名。

A-1・グリット文化層よりアカホヤ層直上まで下げる。A-2・A-3も掘り下げる。一部B-2の調査に移る。測量関係では等高線による作図を手がける。

9月10日(金) 犬飼、中岡、猪石、間口、藤田、他12名。

B-1~B-5・C-1~C-3、小型ユンボで擾乱層の表土のみを剥ぐ。B-3~B-5の表面調整後昨日に統いて発掘にあたる。C-1・C-2を更に掘り下げる。B地区の自然集石遺構の実測に着手する。

9月11日(土) 犬飼、中岡、猪石、尾崎、他10名。

A-1~A-4・B-1・C-1~C-2、発掘を進める。一方792-3に東側より西側にトレント設定10m掘り進める。792-2に進み西側より3カ所にトレントを設け、D-1・D-3として今後の発掘調査の重点とする。

9月15日(水) 犬飼、猪石、藤田、他5名。

792-2を全面発掘に決定し、平板測量を実施。D-1・D-2を掘り下げる。

9月16日(木) 犬飼、中岡、猪石、間口、他11名。

A-4・A-5の配石墓を掘り下げる。一方D-2・D-3を昨日に統いて掘り下げる。次第に遺物を第4層より発見しあじめる。

9月17日(金) 犬飼、中岡、猪石、間口、藤田、他10名。

A-4・A-5、第2層と掘り進める。792-2グリットではD-1～D-3以外の擾乱層の表土を小型ユンボで除く。D-1・D-2は通路の土を除き、D-3は砂礫層で作業ストップして撮影する。出土物の整理。

9月18日(土) 犬飼、中岡、猪石、間口、藤田、他8名。

A-4・A-5、第2層までの土砂を篩にかける。D-1・D-2は昨日に統いて掘り下げる。柱穴が発見され、住居跡と考えられる落ち込みが現われはじめる。

9月19日(日) 森、中岡、間口。

中間指導のため森調査指導員来町しA・B・C・D地区の視察と各地区についてのアドバイスを受ける。

9月20日(月) 犬飼、中岡、猪石、間口、他10名

A-4・A-5の配石墓、第3層へと掘り下げ、篩による土砂の選別と写真記録に納める。D-1・D-2は調査範囲を拡張し、掘り進める。更にD-4を設定し調査を進める。

9月24日(金) 犬飼、中岡、猪石、間口、他10名。

A-4・A-5への雨水止めの壁をつくり、排水作業を進める。一方A・B地区の調査。D地区は前日の調査を続行する。

9月27日(月) 犬飼、中岡、猪石、間口、藤田、他10名。

A-4・A-5の左半分を掘り下げる。B-2よりの柱穴・炉跡らしき遺構を調査する。D-2・D-4を掘り進める。柱穴・土坑状遺構も発見される。

9月28日(火) 犬飼、中岡、猪石、間石、藤田、他11名。

A-1・A-2・B-1・B3・B4と確認調査を進める。D地区はD-2を重点に掘り下げに全力を傾注し掘り進める。

9月29日(水) 犬飼、中岡、猪石、間口、藤田、他8名。

A-2実測、A-1・B-1全面掘り下げ、水路を追求する。D地区を今後D-1～D-6としてグリット番号を統一する。D-4・D-5を掘り下げる。田井式土器出土する。

10月1日(金) 犬飼、猪石、他3名。

D地区を前日に統き作業続行。別府大教授橘昌信氏より現地で指導を受ける。長井數秋氏も同行。

10月2日(土) 犬飼、猪石、藤田、他8名。

D-4・D-5をさらに掘り下げ、遺物を探集する。写真撮影。

10月4日(月) 犬飼、中岡、猪石、間口、藤田、他8名。

A・B・C地区を再確認する。写真によりグリット毎にまとめ、C-1では水脈と井戸を追求する。D地区でD-4・D-5・D-6の掘り下げと周辺の整地段階に入る。

10月5日(火) 犬飼、中岡、猪石、間口、藤田、他11名。

A-4・A-5の配石墓を研究のため復元を試みる。A・B・C地区共にまとめの段階、D地区ではD-6を掘り進める。(配石墓・井戸等は民俗資料として別のシリーズでまとめる)

10月6日(火) 犬飼、中岡、猪石、間口、藤田、他7名。

A・B・C地区の柱穴、出土石器等のまとめ(写真・実測)を完了する。D地区は全面発掘も終了し、地層断面調査の為の壁面を掘り下げ、測量も終了し、土柱標本と、土層断面実測を実施し、土層断面図を作成して、全発掘調査を完了する。

10月8日(木) 犬飼、中岡、猪石、間口、藤田、他1名。

、昨日に統いて、出土遺物の水洗及び分類・記名を完了する。明日は現地報告会の案内を出しているので、発表資料を作成する。

10月9日(金) 犬飼、中岡、猪石、間口、藤田、他12名。

いよいよ最終段階の現地報告会である。午前中は現地の整理及び出土全資料を展示する。

午後2時より現地報告会を実施する。町内、郡内より69名の参加を得て開催。

D地区は犬飼調査指導員、A-C地区は中岡調査員によりそれぞれ説明、報告を実施する。台風に見舞われ低気圧による度々の雨で発掘調査も中断を余儀なくされたが、地元の方々の献身的な協力と特に発掘調査の基礎技術を体得された研究熱心な発掘作業のおかげで、無事全ての調査を完了することができた。

(中岡 修也)

第2章 調査の概要

1. 遺跡の概要

本遺跡の所在する愛媛県南宇和郡一本松町は行政的には高知県宿毛市及び北宇和郡津島町と南宇和郡城辺町に隣接している。一本松町は地形は大きく山間部と盆地部に分けることができる。宿毛市及び津島町と接する処に、海拔1,065米の篠山がある。その西寄り津島町との間に瀬戸黒森があり、城辺町との境には三森・羽子山等海拔800米級の山々が連なっている。また南には大平山山地が、城辺町・宿毛市の海岸線と一線を画している。

さらに一本松町を流れる多くの川は、南東に流れて宿毛湾に注ぐ流れと、南西に流れて深浦湾に入る流れの2つに分けることができる。

篠山に源を発する篠川は、その流域には正木盆地を作り、大駄場台地には火山灰がみられ(AT)、旧石器遺跡としての性格を持つ大駄場遺跡も発見されている。

増田川は八人組の奥地にその源流を求めるが、その流域には縄文早期土器が発見され中屋遺跡が確認された。更に岡出橋下で広見川と合流する。広見低地には大きな河川はないが、この低地からは広見遺跡・札掛遺跡が発見されている。これ等篠川水系は篠川を主流として、増田川・広見川・小山川を合わせて、高知県の松田川と合流して宿毛湾に流れ込む。

茶堂遺跡は惣川水系に属し、小山・中川より流れ出る赤木川と惣川を合わせて満倉より深浦湾に注いでいる。

本遺跡は、標高50m、赤木川との比高差10mで、遺跡の範囲はかなり広域であって、茶堂I遺跡・茶堂II遺跡と呼称されているが、茶堂遺跡の名で総括されている。

対岸には良好な遺物が採集された躊躇場遺跡があるが、本格的調査はなされていない。

2. 発掘調査区の設定

今回の発掘調査は、国道56号線の改良工事に伴う緊急調査である。これを機会に一本松町に点在する埋蔵文化財を再確認し、周辺遺跡との関連研究のため出土遺物の系譜を追求し、その相関関係を解明する機会とする。尚これを推進するため、出土資料を保管し活用いただける体制をつくり、今後の調査への基礎資料とする。

建設省との合議により、発掘調査範囲を設定した。その結果、調査地点の最高所で国道沿いに基準点を設定し、45.375m = 0として東西軸・南北軸に延長しA・B・C・Dの4区画に区分した。A・B・C区(325m²)は4mごとのグリッドを設け、次第に全面調査の体制を整える。A・B区は大正年代より住宅地・納屋・耕地として活用し、C区は農耕地として利用された。この地区は完全に文化層が破壊された地点である。コンクリート除去のため已むを得ず機械を導入する。

C区直下の792-3番地（108m²）は昭和30年代より工事用の海砂置場とし塩分抜きの場所として使用され、文化層も削り取られているため調査区より除外した。

D区（811m²）は過去における表面採集の重点地区であった関係上、遺構の有無等精密調査の必要からD-1・D-2より東西にトレンチを設定し、全面発掘とする。

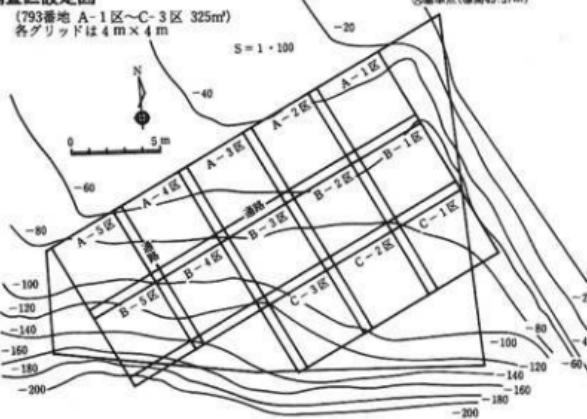
3. 調査方法

調査区の設定は、平成5年6月3日から4日迄実施された試掘調査の結果を受けて、削平攪乱の著しい遺跡中央部を除いた残る東西の両端部分を全面調査とした。

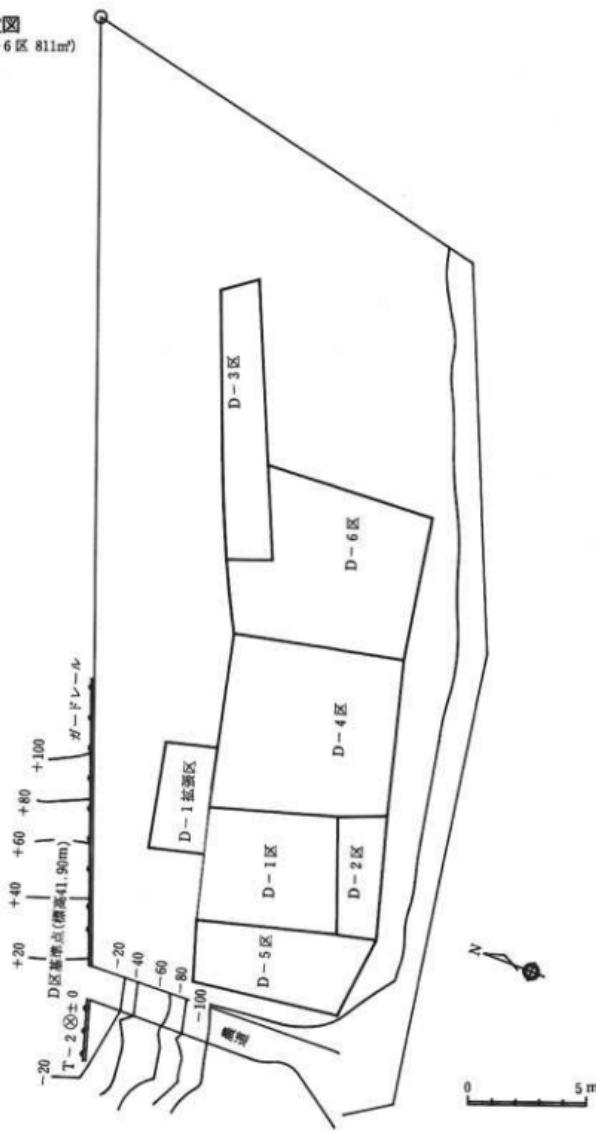
遺跡の東部である793番地は、国道に沿って4×4mのグリッドを13区画設定し、北から南へ向ってA区・B区・C区とした。グリッドの番号は、東から西に向って各1～5区とし、C区はC3区迄である（第3図）。遺跡の西部である792-2番地は、D区と総称し、拡張区を含め6区画を任意に設定することとなった。（第4図）

発掘作業は、層序と遺構を精査しながら集石や遺物遺構を記録した。人力によって鋭意掘り下げを行ったが、一部コンクリートなどの表土剥ぎ等に重機を使用した。最終面としては、A～C区は近代の住居跡で攪乱を受けていることから平均地表下60cmで、そのうちA4区、B1区、C1区は地表下1m20cmに及んだ。D区は包蔵層が深く、平均1mの面に達した。さらにD区最西端であるD5区にて、南北6m巾1mのトレンチを1m60cm迄深掘りを行い火山灰層下の確認も行った。この地点の地層断面より各層10cm立方の花粉分析用の土壤サンプリングを実施した。なお、調査面積はA～C区325m²、D区は811m²であり（792番地3（208m²）はトレンチのみ）、調査期間は平成5年9月2日から10月7日迄である。

図3 調査区設定図



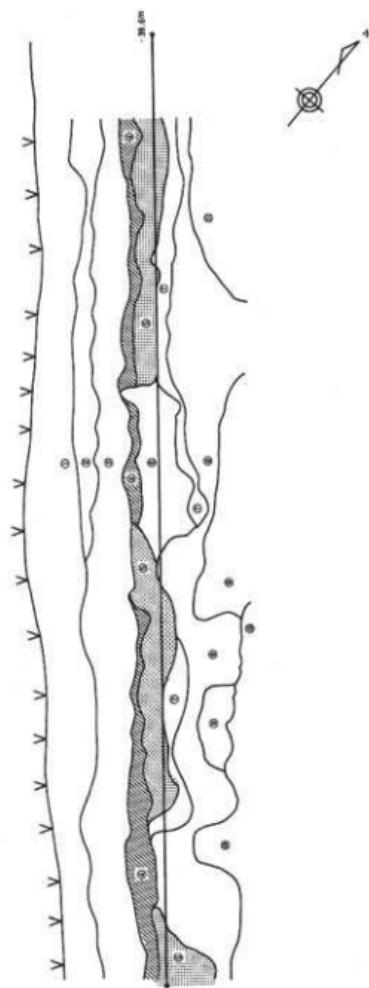
挿図4 調査区設定図
(792番地2 D-1区～6区 811m²)



第3章 検出された遺物・遺構

1. 遺跡の堆積層序

挿図5 D5区堆積層序



- ①表土層 ②オリーブ褐色砂礫混じりシルト ③黄褐色土層 ④暗褐色土層（僅かに残存する遺物包含層文化層） ⑤アカホヤ層（6,300年前、鬼界島火山活動による火山灰） ⑥文化層からの落ちこみ ⑦褐色砂利層 ⑧明赤褐色粘土層 ⑨砂利層 ⑩シルト質砂 ⑪暗赤色粘土層

1・2層は耕作土である。2層はやや粘性がある。3層は部分的に黄褐色を呈し、粘性が強い。少量の土器片が検出されている。4層は厚い所で18cm、平均約8cmで若干の小礫を含み粘性はない、遺物の包蔵層である。5層は、明黄褐色の火山灰層で、火山ガラスを多く含んでいる。D1区ではこのアカホヤ層中に8.5cm大の軽石が検出された。6層は褐色の火山灰が混入したやや粘性のある遺構内土質である。7層は褐色の小砂利（1～2cm大）を多く含む地層である。8層は1cm大の小角礫を含む赤色の粘土層である。9層は0.5～3cm大の角礫からなる砂利層。10層は細かな砂質の淡青白色を呈する粘性の弱い地層であった。11層は小礫をあまり含まず暗赤色を呈する粘性の強い粘土層である。

調査区中、最も高位にあるA1区は緩やかに南西方向に傾斜する舌状台地の稜線部分である。A～C区は擾乱が多く、基本層序も欠落があった。A～C区は堆積も浅く、B5区では地表下60cmで砂利・シルト層に達しその下は、巨円礫を含む洪積礫層であった。

やや傾斜の強いA～C区に比して、D区は舌状台地の先端部となり、西方向に僅かに傾斜するものの標高約40.6m前後の安定した、ほぼ平坦な地形を呈している。各地層は比較的厚い。ここでは、地表下1m10cmの深さに砂利・シルト層が位置する。D区では、3層は後期土器を若干含み、4層は中期土器を主体的に包蔵している。この層が埋土となって円形堅穴住居址が発見され、床面より中期初頭の鷹島式土器が検出された。床面は2cm程の灰色土がうすく堆積し、その直下はアカホヤ層である。アカホヤ層は、平均15～25cmで広く認められるが、高位にあるA～C区ではその堆積は少なかった。このアカホヤ層（黄褐色火山灰）の上面にも土器片と姫島産黒曜石片の散布がD区の広い範囲で見られた。

（中岡・猪石）

2. 遺物・遺構の出土状況

A～C区の遺物の出土は、表層から少量みられ、敲石1点・石錐1点・姫島産黒曜石片1点・貝殻（ニシ類）1点・獸骨1点が出土した。3層からも土器片1点・打製石斧1点・頁岩剝片3点・石核1点・姫島産黒曜石片1点など、ごくわずかであった。当初、A 4区の地表下約15cmに現われた配石は、精査の結果その下部に腐食した鉄製品と陶器片・木炭・小骨片が検出され、明治以降と考えられる配石墓であった。さらにB 1区で石積配石遺構、C 1区でも石積遺構が深く築かれていたが、地元の方々の証言から大正期の住居に伴う生活遺構であることが判明した。B 2区は1層下に竪穴とその中の2個の柱穴が見られたが、埋土が1層であることから比較的新しい時期のものと思われる。その他2個の焼土部分（径約60cm）がその近くに見られた。B 3区では、5層（アカホヤ層）直下に不規則な広がりをもつ配石遺構が存在している。

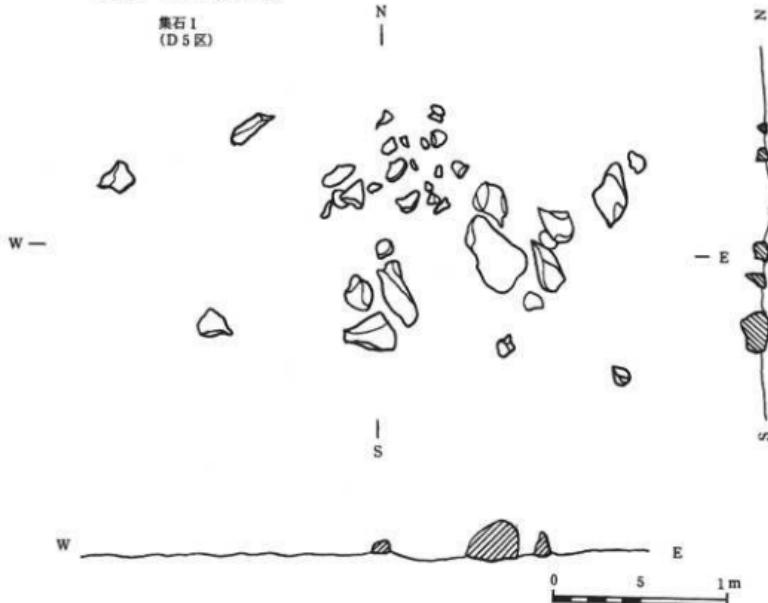
挿図6 B 3区配石遺構



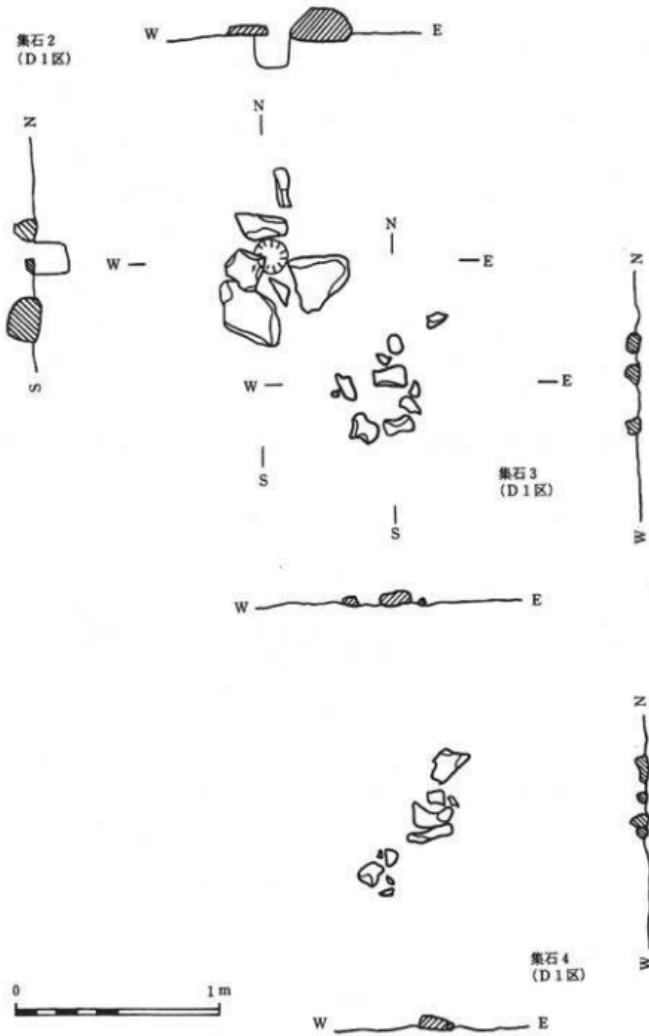
遺物の伴出はないもの人の為的な配石が見られた。ただ、同レベルのC 1 区のアカホヤ層下にある明赤褐色粘土層中に横長剝片が1点見られた事である。複剥離打面と底面部を持つ剝離技術は、明らかに旧石器技法を継承しており、将来検討を要する資料と言えよう。

最も重要と考えられるD区の遺物の出土は、D 1 区3層から少量の土器片が出土し始め、次の4層（黒色土）からは、集中的に多数出土することとなった。特に、中期土器片と姫島産黒曜石片が大半を占め、姫島産黒曜石製石鐵10点・頁岩製石鐵3点・ホルンフェルス製石鐵2点・石錐2点・頁岩製スクレイパー1点・少量のチャート剝片と頁岩剝片などが出土した。このうちD 6 区西南端に石鐵と姫島産黒曜石チップ（石器製作時の屑片）の集中的な散布が見られた。これらの遺物包蔵層である黒土層の落ち込みがD 1 区で観察され、東方向に傾斜した直径25cmの明瞭な柱穴（埋土は黒色土）を最初の手がかりとして拡張区を設け精掘した結果、直径約5mの円形堅穴住居址を検出することができた。そして住居址の西南方向に集石遺構が4群見られた。またD 4 区では4層直下のアカホヤ層上面に接して、前期末の田井式土器が出土した。アカホヤ上層の遺物の散布は、上部2cm内のうすい分布であった。D区では、この5層より下層からの遺物の出土は確認できなかった。

挿図7 D 5 区集石遺構



挿図8 D-1区集石 2, 3, 4

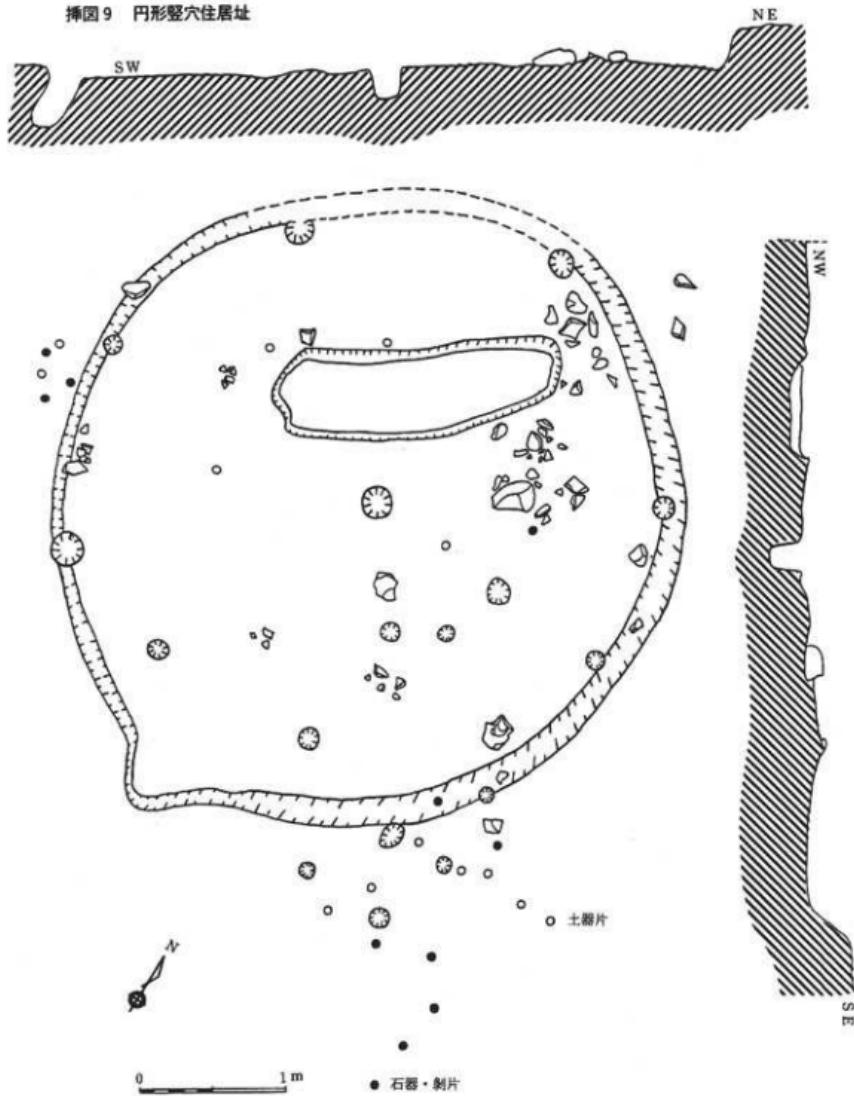


遺構としては、竪穴住居址の他多数の柱穴と、3個の土坑状遺構、4基の集石それに配石遺構がある。

1) 円形竪穴住居址

住居跡の埋土である黒色土の落ち込みは、西南部で6cm東方側は約30cmと深くなっている。アカホヤ層（黄褐色火山灰）を切り込む黒色土を取りのぞいた床面は、約1.0～2.5cmの薄い灰色土に覆われている。灰分を含み粘性は弱い。柱穴は、周囲9個と内部に4個検出された。また、住居址の外側にも4個の柱穴が認められた。竪穴住居址の柱穴のうち、比較的大きな柱穴は、西側（径28cm）、北側（径18cm）と中央（径24cm）に存在した。西側の柱穴は、深さ35cmで、約45度程東に傾斜するものであった。他の柱穴径は北から15・11・13・10・15・16・10cmで、内部には長径20cm短径16cmの柱穴1と、径約10cmの2個の柱穴が、中央柱穴と縁面の中間に位置している。竪穴は、南南西方向に張り出し部が認められ、縁面は浅い。張り出し部に接近して、左右に2個の柱穴がある。この南方部分が、竪穴住居の入口であったものと考えられる。中央柱穴の北側には、広く（東西約2m、南北59cm）深い土坑状遺構（貯蔵穴）がある。深さは5～8cmの間であった。この北辺において、灰色土の床面から中期初頭の土器片が検出された。さらに、この東側に2基の集石があり、その南側の集石には頁岩剝片を含み、22個のうち東端の2個に熱による赤化が認められた。東側の集石は10個の礫で構成されている。石質はそのほとんどが砂質頁岩で円礫を主体とするものであった。また南方入口付近にも5個の角礫で構成された集石と、3個の角礫からなる小集石が存在し、それらはすべて熱による赤化を示していた。そして、竪穴の西側縁面に密着した5個の礫で構成された集石と、その北東方向にも同数の小集石が位置しており、これらには赤化は見られなかつた。竪穴内部の南東には、加工痕のある偏平な石が残されている。作業台として使用されたものと考えられる。竪穴住居址全体の計測値は南北約4.9m、東西4.85m、張り出し部を含めた最大長は5.04mである。これらからこの遺構は、張り出し部をもつ径約5mの中期初頭期の円形竪穴住居址であると判断される。またこの住居址には、外側南方部分に船元1式土器片や姫島産黒曜石製石鐵それに姫島産黒曜石チップなどの集中散布が認められた。また外側西方に接近して8cm大の中期土器1片と姫島産黒曜石片3点が散布している。姫島産黒曜石片の1つは5cm大の比較的大きな剝片であった。横長剝片に加工を加えナイフあるいはスクレバーとして使用された痕跡が見られた。なお竪穴住居址内の遺物の遺存は、土器片4点、姫島産黒曜石製石鐵1点、姫島産黒曜石剝片1点、頁岩剝片1点であった。

挿図9 円形整穴住居址

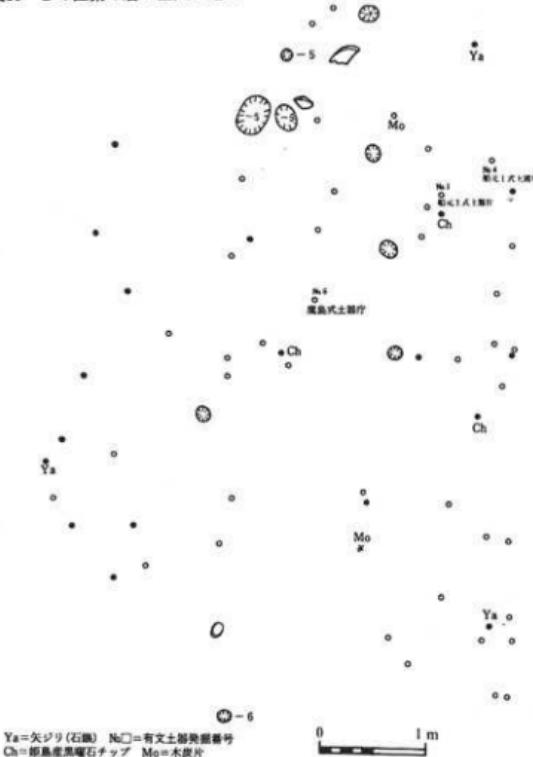


2) 柱 穴

円形豎穴住居址に伴う柱穴以外に、63個のピット（落ち込みの穴）が確認された。その多くは柱穴によるものと考えられる。

このうち7層（灰褐色砂利層）内にあって、埋土がアカホヤ火山灰の例が3個検出された。直径20~24cmの円形で深さは16~22cmであった。また5層中に見られた埋土が黒色土の場合には、11例である。直径は15~17cm、深さは5~15cmである。そして4層中（黒色土層）内、埋土の暗褐色粘土であった例は多く、49個検出された。直径は9~36cm間に散在し、約9~15cm迄の多数グループと、約18~35cm迄の小数グループに大別できる。深さは3.5~14cmの間であった。

挿図10 D 4 区第4層の柱穴と遺物



挿図11 D4区第5層上面の出土状況



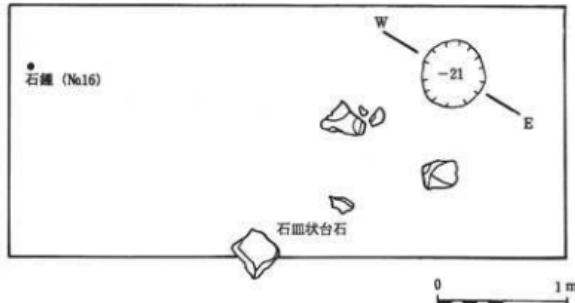
これらは相互の関係が不規則なものが大部分である。ただ幾つかは関連づけられる例がある。まずD 6 区東端で、北方に半円状に連続する3個の比較的大きな（直径20・21・24cm）柱穴が見られた。埋土はアカホヤ火山灰である。アカホヤ火山灰層下直前から前期末のいずれかの時期に形成されたものと考えられる。また5層アカホヤ層に埋没して遺存していたD 1 区北辺の集石中央の単独柱穴（直径17cm、深さ15cm）は、集石と関連づけられる例であり、アカホヤ火山灰二次堆積時期のものと考えられる。そしてD 1 区南端にある4個の半円状に西方に開いた柱穴（埋土は暗褐色粘土、4層中）は、推定2.7mの円形プランが予想される。同様にD 4 区の北寄りでは径3.4mの方形プランが推定される6個の柱穴が見られた。前者は、中期から後期にかかる時期に形成されたものと考えられる。後者には、中期初頭期の土器片が伴出している。（挿図10）

3) 土坑状遺構

土坑状遺構は、D区3例が検出された。土坑状遺構の1例目は、D 4 区の4層（黒色土）中に埋没していたもので、埋土は暗褐色粘土であった。長径65cm短径41cmの梢円形で、深さは6cmと浅い。西方10cmの位置に1個の柱穴状のピット（直径13cm深さ3cm）が近接している。土坑状遺構の2例目は、D 3 区の7層（灰褐色砂利層）中にあって、直径50cmのほぼ円形をなしている。深さ21cmで、埋土はアカホヤ火山灰であった。同レベルのD 4 区で前期末の土器片が出土している。土坑状遺構の3はD 6 区7層中に深さ24cm迄掘り下げさらに東に入り込んだやや傾斜（約40度）した特殊な遺構である。直径52cmの円形をなし、埋土はアカホヤ火山灰であった。



挿図12 D 3 区土坑状遺構と遺物



4) 集 石

竪穴住居址内の集石（6基）以外に、集石が4基検出された。そのうち2基は熱による赤化の認められるものである。いずれも竪穴住居址の南西部に近接している。

集石 1 は、D 区最西端である D 5 区北辺にあって、5 層上面に位置している。ほぼ平面に置かれた 37 個の礫より構成されている。集石の中央はやや南東方向に開いた空間が見られる。南側左右にある長径 40cm の円礫の間は 40cm 隔たって、その空間の北方部分に 5 ~ 14cm 大の比較的小さな礫 20 個が約 60 × 70cm の範囲に散在している。熱による赤化は見られなかった。中期の土器片が伴出している。

集石 2 は、集石 1 の東に隣接する D 1 区において、5 層（アカホヤ層）に埋没して見つかっただ。長径約 40cm の円礫 2 個と 17 × 20cm 大に成形された平偏な台石を含む 6 個の礫で構成されている。そのほぼ中央には、直径 17cm 深さ約 15cm の柱穴 1 個が存在する。ポールを中心とした特殊な作業遺構と思われる。

集石 3 は、集石 2 の南東方向約 40cm に近接する比較的小さな 10 個の礫（長径 4 ~ 16cm 大）がほぼ U 字状に並び、そのいずれも熱による赤化が認められた。アカホヤ層中に包藏されていたものである。

集石 4 は、集石 3 の南方約 1.4m に位置し、集石 3 と同レベルでアカホヤ層内の遺存である。ほぼ直線上に並んだ 10 個の礫と 1 個の敲石で構成され、敲石も含めすべて熱によって赤化していた。礫の大きさは 4 ~ 24cm の間であった。

以上のうち集石 1 は中期の遺構であり、集石 2・3・4 は、アカホヤ火山灰二次堆積時期に形成されたものと考えられる。（挿図 7・8）

5) 配石遺構

今回の調査区中最も下層位から検出された配石遺構である。

この配石遺構は、B 3 区 5 層下にあって、洪積礫層上で検出された赤色粘土層に埋没していたものである。不規則ながら約 2 × 3m の範囲に幾つかのまとまりが看取できる。その位置関係を分析すると、まず配石遺構の西端に長径 36cm 大の円礫を含む 3 個のほぼ半円形状に囲む、9 個の連なりが見られる。またその東北約 80cm の位置にも径 52cm の範囲に 8 個の礫（長径 8 ~ 28cm 大）がやや円形状にまとまっており、さらにこの 2 群の中間に南北 76cm の礫のない空間を囲んで 9 個の礫がサークルをなし、北東の礫群と接触している。そしてこれらの南東には、14 個の礫（径 4 ~ 22cm）がサークルを呈している。何らかの遺構の痕跡を留めているものと考えられる。（挿図 6）

C 1 区の同層位同レベルから、後期旧石器時代の可能性のある横長剝片が検出されており、包藏層である赤色粘土層等の時代同定が必要と考えられる。

（猪石 広明）

第4章 出土遺物

1. 縄文土器

本遺跡D区の第5層（アカホヤ層）直上から縄文前期後半期の土器、第4層（暗褐色土層）から縄文中期の土器が検出された。縄文後期土器は落ちこみの形で一点検出されている。すでに述べられているように、本来の文化層たる第4層は、客土作業のため、大型機械導入により削平され、わずかに残された文化層は縄文中期土器を主体とするものとなっている。出土器は200点を越すものであったが、機械により小片となり、図示し得るものは少ない。

以下の如く、本遺跡出土土器を三類に分類する。

1) 縄文前期土器（第13図1）

色調は明るい赤褐色である。ゆるやかな波状口縁に、口縁端部がわずかに外曲し、口縁内面部分がやや膨隆する深鉢形土器である。その膨隆部と下胴部内面との界にはわずかの稜が形成されている。その稜の上面の膨隆部には、擦りの強いRの斜行縄文が付される。

器表面は、同様の斜行縄文が地文となる。約5～6mm程度の隆帯三条が、波状口縁に添う形で貼付される。その隆帯上には、鋭利なヘラ状工具による細かいキザミ目が直交するよう施される。一見して中期土器に付されるものと手法を異にするものである。なお、斜行縄文地文は、拓図上では隆帯の蔭となり明瞭に表わせてないことを付記する。この斜行縄文地文は器面全体に付されるものと想定される。

鋭利なヘラ状工具によるキザミ目施文は口縁端にも付され、全周する。以上述べた口縁端部のキザミ目、口唇部の肥厚の様相、内面の縄文施文、器表面の縄文地文、幅広の隆帯と鋭いキザミ目施文等は、鎌木義昌により、岡山県玉野市田井遺跡出土土器を標式として提唱された田井式土器^①に準じるものである。なお今次の発掘調査以前に採集された土器（第2図7）と同一個体を成すのではないかとの意見も出されたが、色調その他細部の観察から推して別個体のものとしておきたい。

2) 縄文中期の土器

Ⓐ 和歌山県有田郡鷹島遺跡出土土器^②を標式とする鷹島式土器をここに一括する。（第13図2～第14図7）

(2)は、平縁口端部の器表面に帶状の爪形隆帯文を付したキャリバー状の深鉢形土器と想定される。口縁部内面には、口辺直下に肥厚帯（幅1.6cm）を持ち、ここに硬い材料の原体を用

いた斜行(R)縄文が付されている。この内面縄文帯と器下面との界には明確に段が生じている。口縁端部にはキザミ目施文が密に付される。やや左上り左下がりの斜行ぎみといえようが、よく観察すると逆C状の爪形文が混じるものとなっている。

器表面の縄文地文は、内面同様に硬い原体に拋るものであるが、内面とは様相を異にし、縦走ぎみのものとなる。さらに口縁直下に横走する隆帯上の爪形施文は、C状を呈することが(2)及び小破片ながら(3~6)からも観取される。このような、内・表面での施文の対照的な様相は、鷹島式の持つ独特な特徴とし得る。器形の全体像は小破片から明確にし得ぬが、(2)(3)が胎土、色調から推して同一個体とされることから、キャリバー状を成する内湾口縁の外折部分あたりに更に一条の爪形隆帯を持つ深鉢形土器と考えられよう。

(7)は胎土に金雲母を多量に含む小さな波状口縁となるキャリバー状の深鉢形土器である。器表面でのC字状の爪形文、縦走ぎみでかつ長大な圧痕施文を呈する縄文施文は、鷹島式土器の特徴が良く現われている。

⑧ 船元式土器をここに一括する。(第14図8~10、第15図11~15、第16図18~26、第17図27~31・33)

(8)は、波状口縁を成す船元I式A類土器とし得る。口縁部内面を肥厚させ、燃りのあらい原体による縄文が付される。その肥厚部と下脣部内面との界には稜が生じる。口縁端にはキザミ目を持ち、器外面には口辺に横走または斜行するキザミ目突帯を持つものである。(9)もこれらに属する土器片である。

(10)(11)は、船元I式C類とし得る。(11)は、器胴上半が内側にややくびれる鉢形土器で、極めて磨削度が高いものの、口縁内面にあらい縄文、口縁端キザミ目、波状口縁に沿って一条の爪形文、更にその下方に伸びる斜行爪形文が観取される。

(第15図15~第16図19)は、極めて浅い沈線による施文で、間壁忠彦^⑨に拠り船元III式E類とされたものである。

縄文地の付された胴部破片を(第16図20~第17図31)一括して図示する。いずれも鷹島式土器及び船元式土器の胴部破片とし得る。どの口縁部と整合するかを断定することは困難であるが、このうち、節の整った長大な縄文圧痕を持つもの(20~22)は鷹島式土器に比定が可能となろう。また間壁忠彦によって無節縄文(船元I式H類土器)とされたものは(24~25)としておきたい。底部(第17図33)は一個のみの検出に留った。径10cmの平底で、金雲母を多量に含むものであった。

◎ 阿高系土器をここに一括する。(第15図12~14)

いずれも小破片であるが、(1)は、親指で凹文を施した様相が観取される。下関市神田遺跡④の黒褐色包含層下部で検出されたものと同様の様相を持つものである。

3) 縄文後期土器 (第17図32)

今次の調査で第4層が比較的良く保存されたD5区より唯一点、縄文後期土器が検出された。縄文後期初頭の中津式土器である。

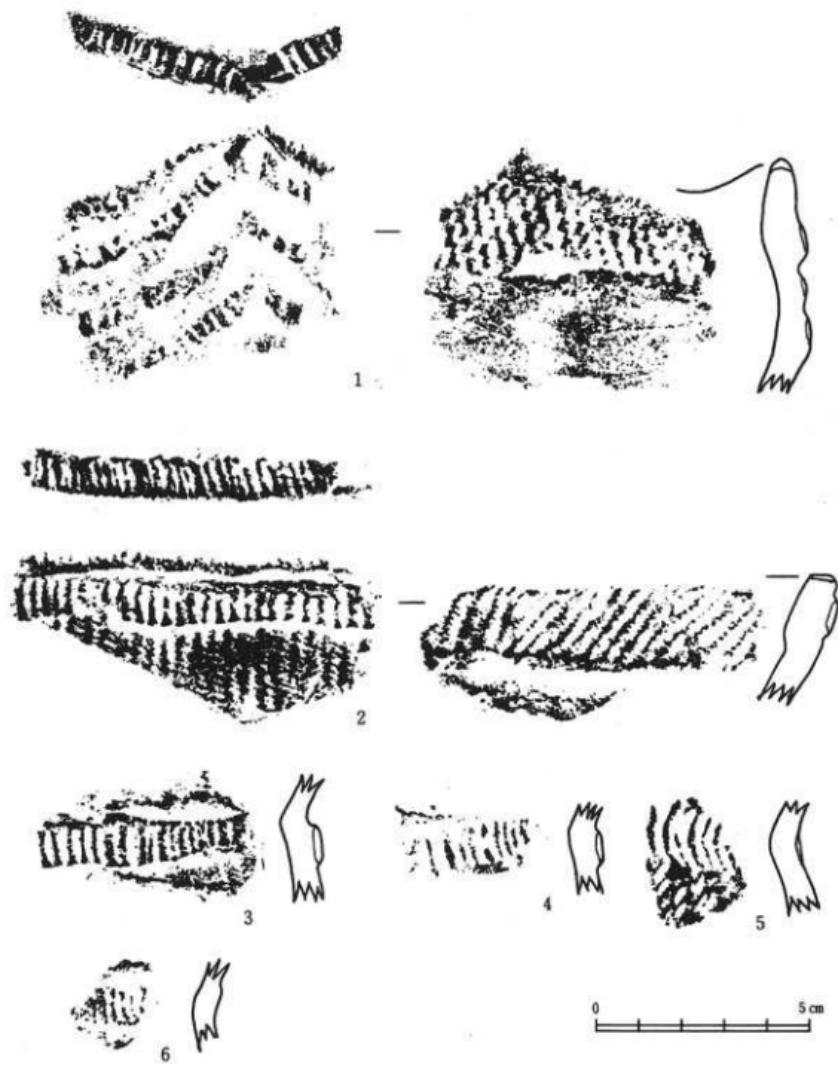
(註) ① 鈴木 義昌 「玉野市田井遺跡の調査—仮称田井式について」『吉備考古78・79』
1950

② 異 三郎・中村 貞史 「鷹島」南紀考古同好会 1969

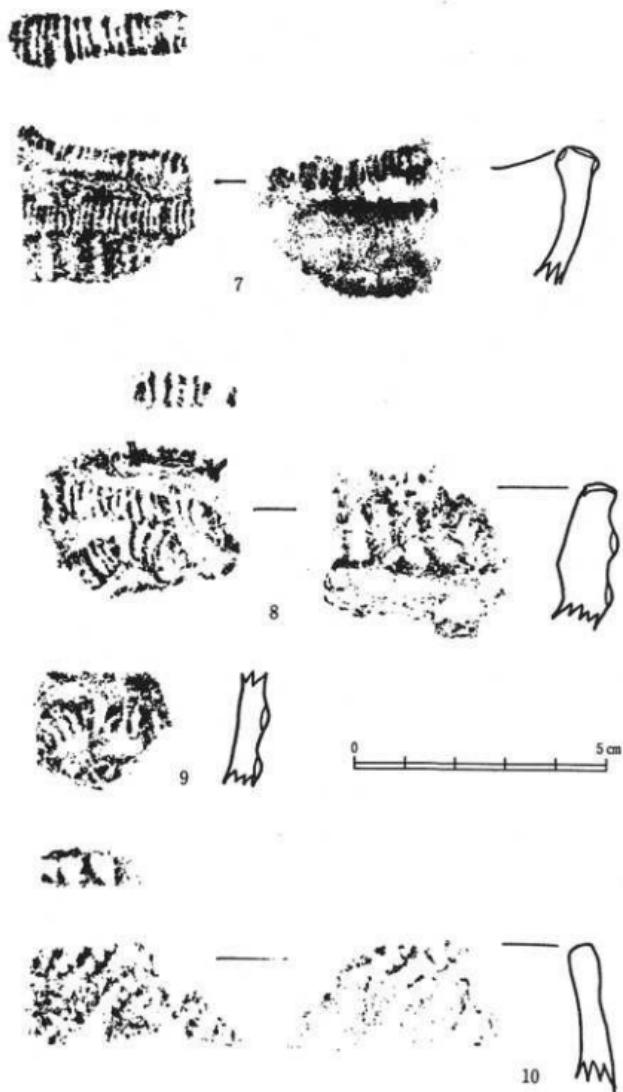
③ 間壁 忠彦 「里木貝塚」『倉敷考古館研究集報7』1971

④ 山本 一朗 『神田遺跡』山口県教育委員会 1973

插圖13 D區出土土器 1



挿図14 D区出土土器 2



挿図15 D区出土土器3

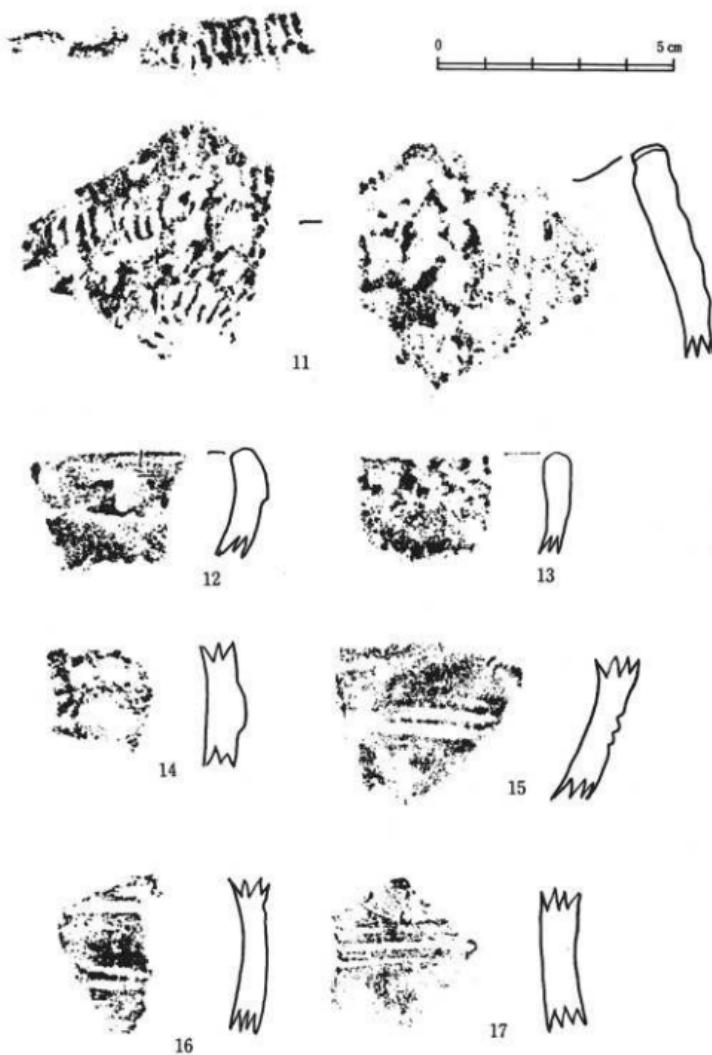
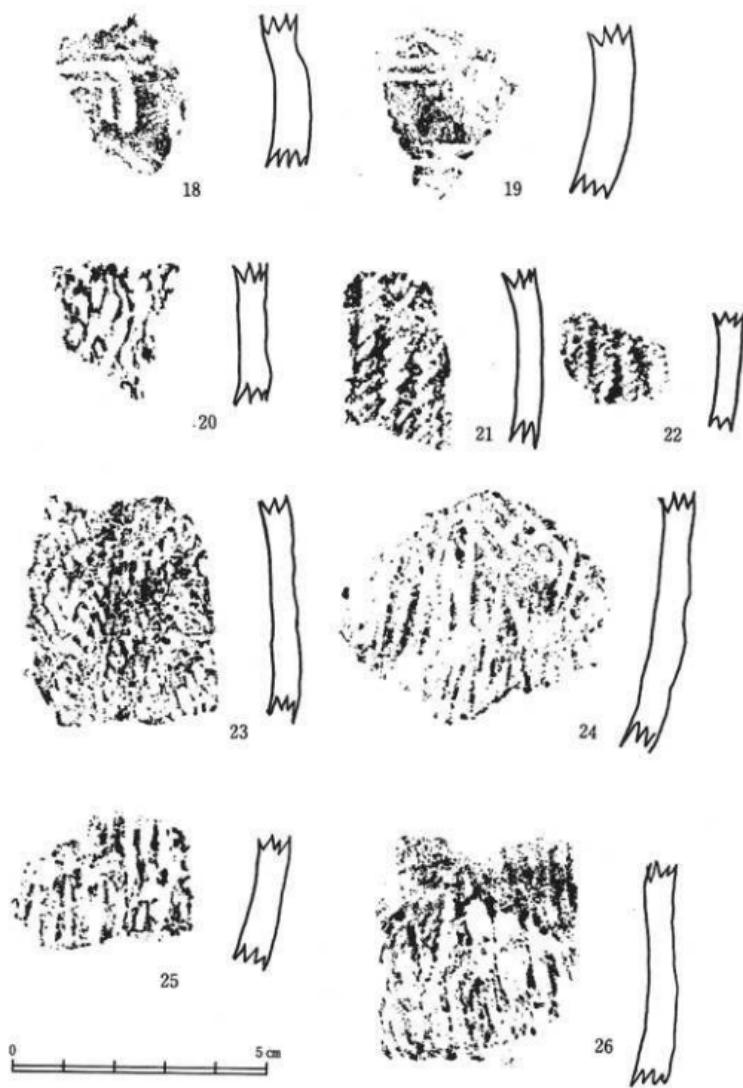
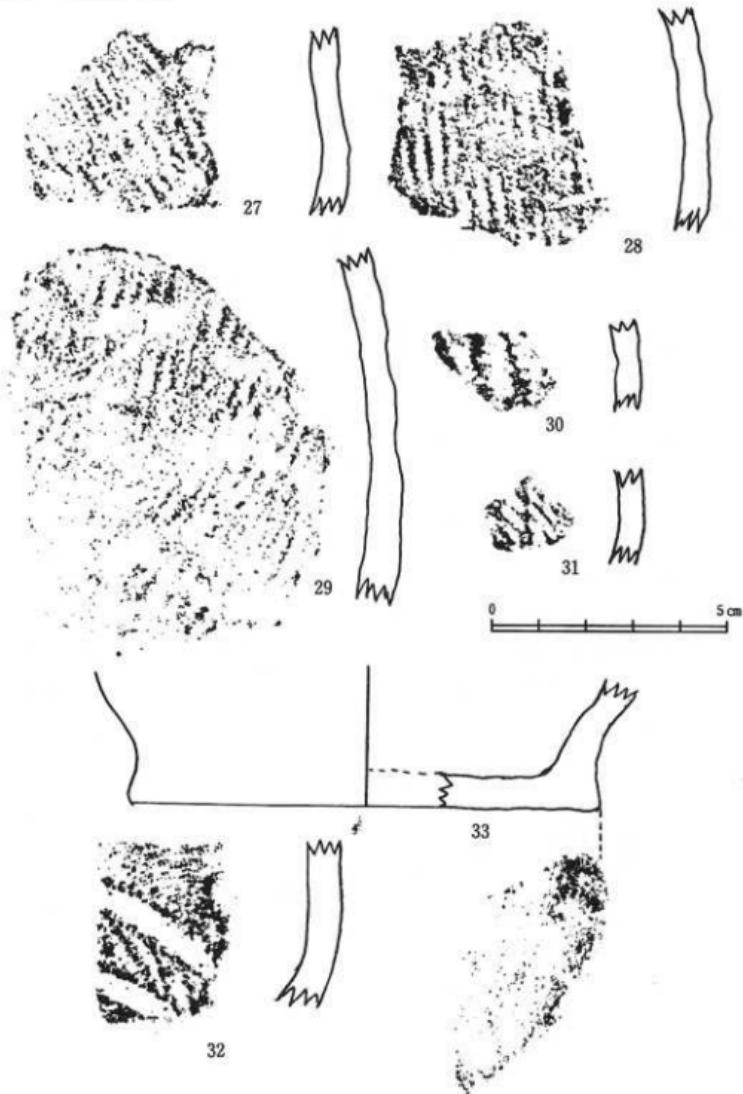


插图16 D区出土土器 4



挿図17 D区出土土器5

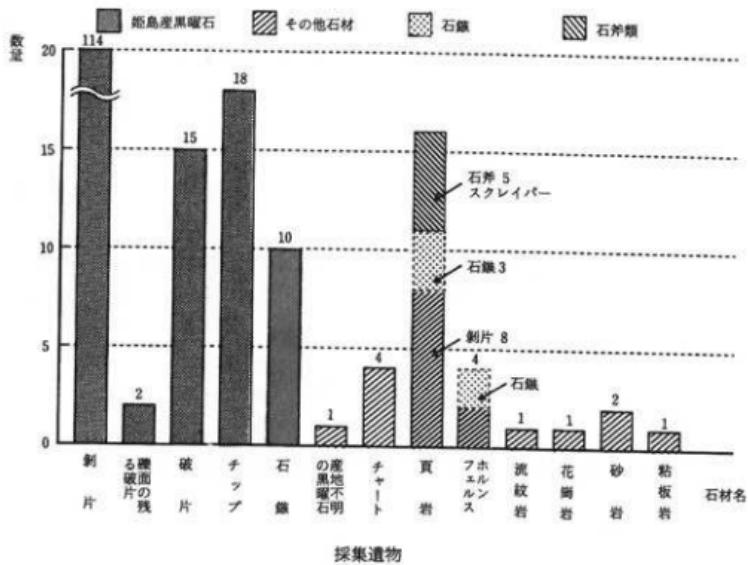


2. 石 器

石器の内訳は、定形的な石器が石鏃15点、石錐3点、敲石1点、打製石斧1点、台石1点とスクレイパー4点であった。その他149点の姫島産黒曜石片がある。その多くに使用痕が認められた。

石鏃の約半数は姫島産黒曜石製であった。他の石材としては、硬質の頁岩とホルンフェルスやチャートが少量見られた。姫島産黒曜石片のうち原礫面の残存するもの2点が見られ、他に5cm大の横長剝片1点が住居跡に隣接して検出されている。以下石鏃、石錐、敲石、打製石斧、スクレイパーの順に記述したい。

挿図18 採集遺物石材別グラフ
姫島産黒曜石・その他石材



1) 石鏃 (石ヤシリ) 一(第19図1~15)

石鏃は次の様に7分類できる。すべてD区の出土である。

- a類……厚さが4ミリと厚く、長ハート形を呈するもの (第19図1)。
- b類……胸形を呈し、脚部のわずかなもの (第19図2)。
- c類……二等辺三角形を呈し、脚部の抉りの浅いもの (第19図3~7)。
- d類……二等辺三角形を呈し、脚部の抉りの深いもの (第19図8)。
- e類……脚部が開き、身が二等辺三角形鏃に比して低いもの (第19図9~11)。
- f類……尖端部が低く、脚部の左右がアンバランスであるもの (第19図12~14)。
- g類……脚部が大きく開き、身も細長いもの (第19図15)。

a類(図1)は、尖端が細かく肩部の一部が鋸歯状を呈している。全体に厚みがあり、入念な押圧剝離によって長ハート形に整形されている。基部の抉りに伴う剝離は1~2回にとどまっている。姫島産黒曜石製であり、5層(アカホヤ層)上面からの検出である。

b類(図2)は、尖端部分が幅広く、脚部がわずかに張り出している。基部の抉りは3回の剝離によってなされている。姫島産黒曜石製で、4層下層の鷹島式土器に伴う出土であった。c類(図3~7)二等辺三角形を呈すもののうち、(3)は脚部の抉りがごくわずかである。片脚の末端を欠損している。(4)は、抉りに伴う4回の剝離面が見られる。(5)は、脚部がやや広がりを持ち、片面全面にタール状炭化物の付着が著しく見られた。(6)には、片面に素材面が広く残されている。(5)・(6)ともに頁岩製である。(7)は、両面とも基部から尖端へと押圧剝離が明瞭に観察された。d(図8)は、最も大きな石鏃で、一面に素材面が残存している。頁岩製である。e類(図9~11)(9)は、側面が鋸歯状に凹凸がみられ、片脚は短い。(10)はかなり偏平な素材を緻密な剝離によって整形している。重量は0.5gと最も軽い。(11)は両脚の末端を欠損している。f類(図12~14)(12)は、姫島産黒曜石製としては最も大きい。(13)は、尖端部が欠損している。(13)と同じく、推定線よりは低いものと思われる。

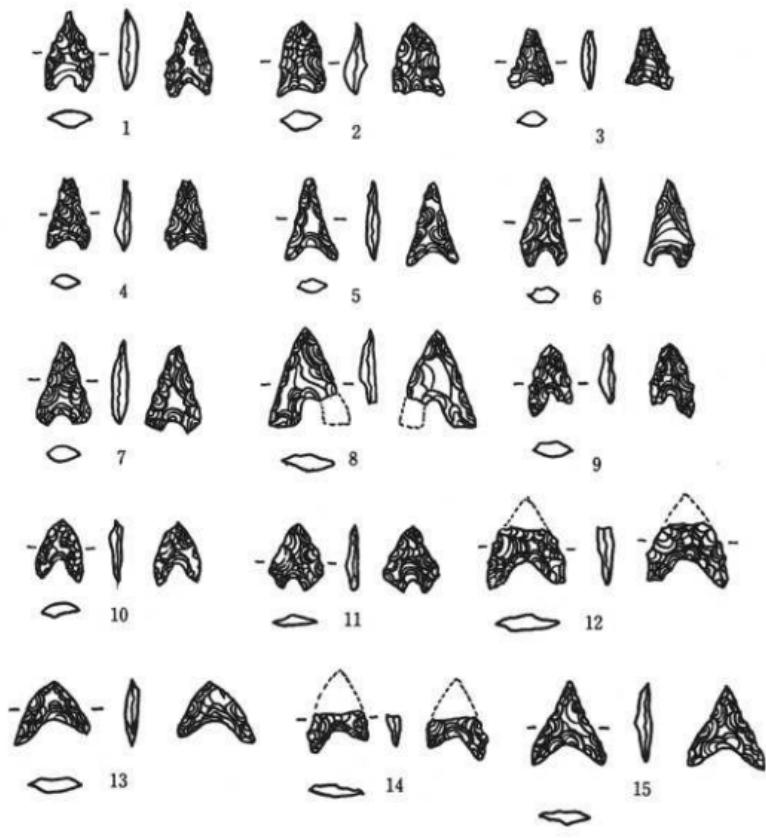
g類(図15)左面は基部から尖端へ向かって押圧剝離がなされ右面は、尖端部から剝離が進んでいる。4層上層から検出された。ホルンフェルス製である。

以上のうちa類は、縄文前期末、b~f類の大部分は中期初頭期に伴うものである。g類は、時期を特定できないが、中期後半~後期初頭の間にあると考えられる。

なお、石材の多数を占める姫島産黒曜石製の石鏃(1・2・3・4・7・9・10・11・12・14)と剝片等の存在は、この時期いかに姫島産黒曜石へ大きく依存していたかを物語るものである。特に南端の南宇和郡地帯は、原石出土地が本遺跡を含め3ヶ所、その他の散布、出土地が59ヶ所と密集しており、なかでも本遺跡の縄文前期末~中期前半期に於ける使用比率は著しく高い。

姫島産黒曜石を介した東部九州と近密な交流関係にあたったものと考えられる。

挿図19 出土石器



2) 石錐（石おもり）一（第20図16～18）

D区で2点、ABC区で1点出土した。いずれも扁平な円錐を素材としている。

図16は、楕円状の火成岩（雲母の少ない花崗岩と考えられる）の礫を長軸方向の両端に抉りを残すし、両面に1～3回程の剥離を試みているものである。円錐面と剥離面に細い小穴が認められる。重量145g

図17は、砂岩製の円錐を素材に用いている。2～5回の剥離痕が見られる。243g

図18は、粘板岩の楕円錐を素材に用いている。

長軸の一方は、10回程の剥離面が残っており、石錐として特異な様相を持つ大型石錐である。おそらく、外洋で使用されたものと考えられる。255g

3) 敲石（タタキ石）一（第21図19）

一面に2回の剥離痕と、もう一面（右図）に2回の剥離痕2ヶ所が観察される。全面に微細な使用痕が多く見られ、引っかき痕と約5ミリ径の円形の磨耗痕、それに数ミリ～5ミリ程度の細長い磨耗の痕跡を残すものがある。左図の左側面は、幅7cmにわたり著しい磨耗が認められ、下端部も砂岩の円錐が著しく磨滅している状態である。骨やナツツ類等の加工に長期間又はひんぱんに使用されたものと考えられる。

4) 打製石斧（石オノ）一（第22図20）

上部が欠損している。頁岩製で、末端と側方に刃こぼれ状の小剥離が見られる。

5) 石斧状石器（第22図21）

図21は、末端と側面に調製痕が認められる。石核を再利用したものと考えられる。上部が欠損している。頁岩製である。

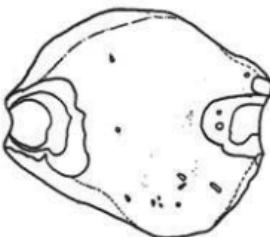
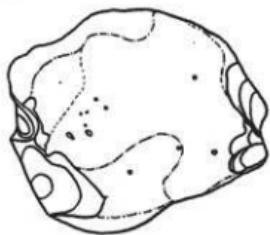
6) スクレイパー（第23図22）

図22は、底面（側方からの剥離）をもち、複剥離打面の横長剥片をスクレイパーとして腹面側から調整を行っているものである。図23は、両面に刃部の加工が見られる。4層下層。図24は、片面に細かな剥離によって、刃部をつくっている。5層上面の出土であった。その他、8層下位検出の流紋岩製のスクレイパーがある。

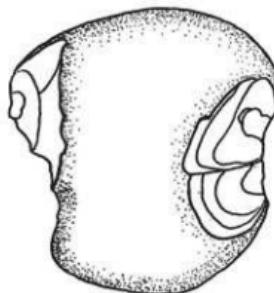
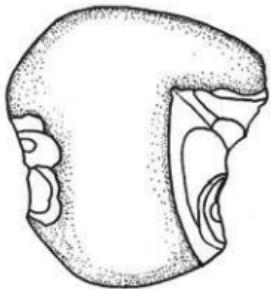
この流紋岩の横長剥片は第1次離剝面（腹面）側から底面を調整している。複剝離打面で打点は、自然縫面との稜線上にはほぼ一致する。同位置を後退させてやや縦長的な剥片を得た後に数回の加撃によって刃つぶしを行い、底面部を作り出している。B3区の配石遺構に近接して見つかった。瀬戸内技法とは異なる要素を持つものの瀬戸内技法の直前の様相を示しているのかも知れない。

挿図20 出土石錐

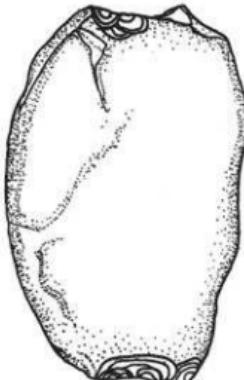
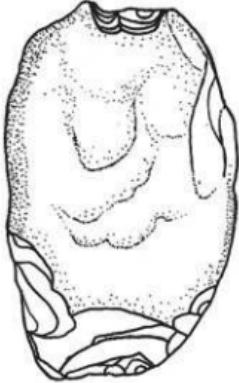
16



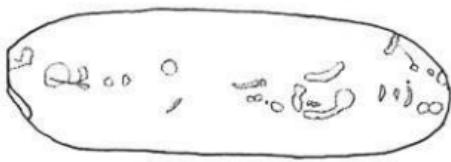
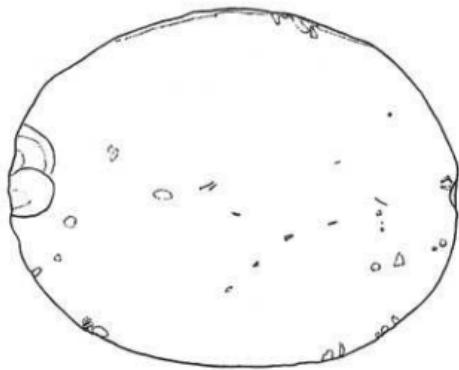
17



18



挿図21 出土敲石



19

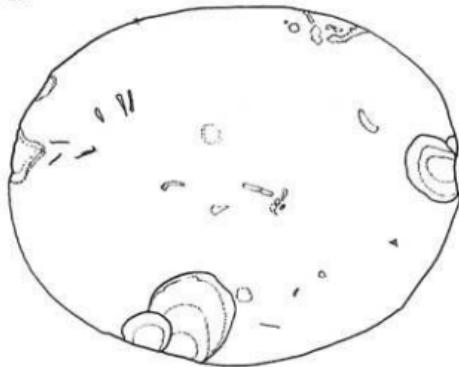
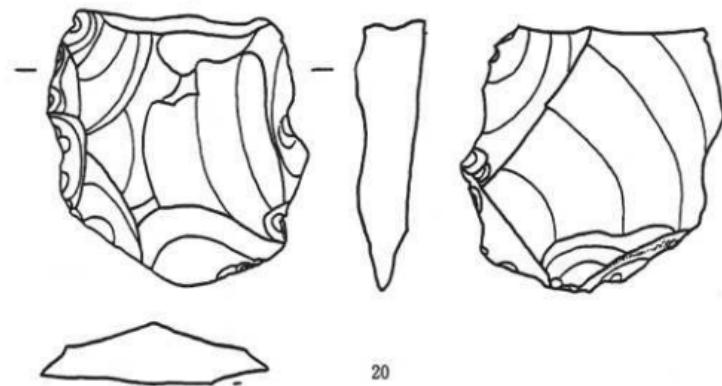
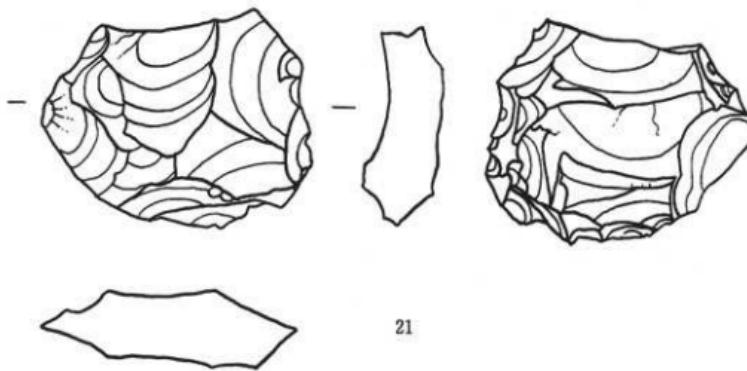


插圖22 出土打製石斧・石斧狀石器



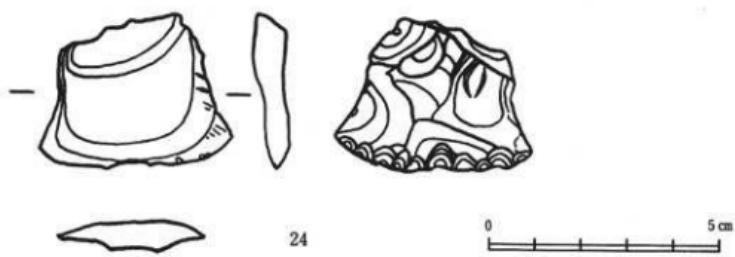
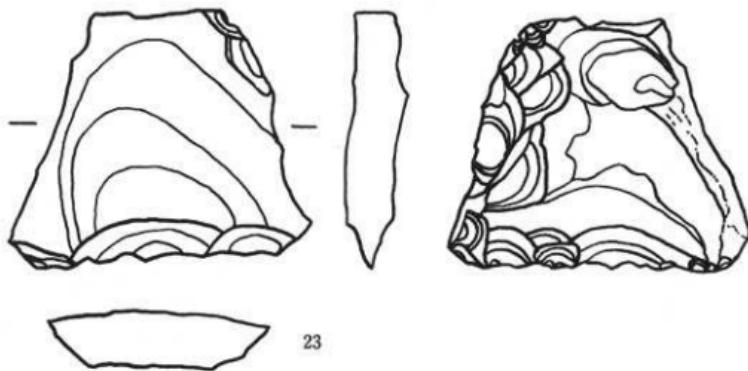
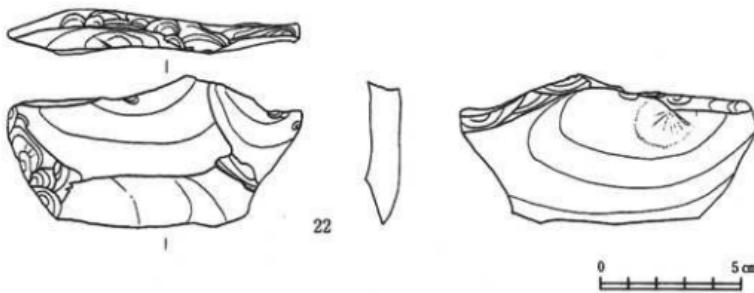
20



21



挿図23 出土スクレイパー



挿図24 出土石器一覧表

遺物番号	器種	出土地点	層位	測定値 () は現存値				遺存状態	石材
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
1 石 錐	D 1	5層上面	2.2	1.3	0.4	0.9		完形品	黒曜石
2 //	//	4層下層	1.9	1.4	0.5	0.9		//	//
3 //	D 6	//	(1.6)	(1.2)	0.3	(0.6)		尖端・片脚欠損	//
4 //	//	//	(1.8)	(1.1)	0.3	(0.6)		尖端欠損	//
5 //	//	//	2.2	1.2	0.3	0.7		完形品	頁岩
6 //	D 4	//	2.2	(2.1)	0.4	(0.7)		側面欠損	頁岩
7 //	//	//	2.2	1.5	0.3	1.0		完形品	黒曜石
8 //	D 6	//	2.5	(1.9)	0.3	(1.1)		片脚欠損	頁岩
9 //	D 1	//	1.9	1.1	0.3	0.6		完形品	黒曜石
10 //	D 6	//	1.6	1.2	0.2	0.5		//	//
11 //	D 1	//	(1.7)	(1.4)	0.25	(0.6)		両脚欠損	//
12 //	D 6	//	(1.7)	2.0	0.4	(1.1)		尖端欠損	//
13 //	//	//	1.7	1.9	0.4	0.7		完形品	ホルンフェルス
14 //	D 4	//	(1.1)	1.5	0.3	(0.6)		尖端欠損	黒曜石
15 //	//	4層上層	2.1	1.9	0.3	0.9		完形品	ホルンフェルス
16 石 鍤	D 3	4層下層	7.5	6.0	1.8	145		//	花崗岩
17 //	D 6	//	8.3	7.6	2.5	243		//	砂岩
18 //	A		11.2	6.8	2.3	255		//	粘板岩
19 敲 石	A 2	5層上面	13.0	10.3	4.0	930		//	砂岩
20 打製石斧	B 2	3層下層	(7.1)	6.1	1.1	(75)	上部欠損	頁岩	
21 石斧状石器	B 3	3層下層	(5.2)	6.6	1.8	(80)	上部欠損	頁岩	
22 スクレイバー	C 1	8層	10.3	5.2	1.4	57	完形品	頁岩	
23 //	D 6	4層下層	6.3	5.2	1.3	6.5	//	//	
24 //	D 1	5層上層	4.2	3.2	0.7	19	//	//	

第5章 まとめ（総括的所見）

1. 自然科学分析

はじめに

茶堂II遺跡（愛媛県南宇和郡一本松町中川に所在）は、一本松町を流れる赤木川の両岸に発達する河岸段丘上に位置する。本遺跡は、遺物の出土状況から、対岸に位置する茶堂I遺跡と性格がほぼ同じであると推定されており、縄文時代前期や縄文時代中期（船元式土器）の遺物包含層が確認されている。

今回、本遺跡周辺の古植生について検討することを試み、花粉分析・植物珪酸体分析を実施することにした。ただし、花粉分析については、分析試料を観察したところ、これまでの調査事例から花粉化石がほとんど検出されないことが予想されたため、堆積物中に花粉化石が残存しているか否かの確認にとどめた。また、堆積物中に認められたテフラの確認も同時にに行うこととした。

1) 層序と試料

試料は、層位試料として10点（試料番号1～10）採取された（表1）。このうち、試料番号6が縄文時代前期とされており、試料番号4が縄文時代中期（船元式土器）の土器包含層とされている。また、試料番号5が採取された層位は、K-Ahが含まれるとされている。この確認調査を行ったところ、試料番号5にはK-Ahに由来する火山ガラスが多量に認められた。これより、本層位はK-Ah降灰年代に近いが、試料中に小砾も含まれていることから後代の擾乱の影響を受けているとみられる。

表1. 分析試料

試料番号	土性	備考	P	PO
1	オリーブ褐色疊混じり砂質シルト	表土（現水田層）		
2	オリーブ褐色砂疊混じりシルト	床土		
3	黄褐色砂疊混じりシルト			
4	暗褐色疊混じりシルト	縄文時代中期遺物（船元式土器）包含層	<input checked="" type="radio"/>	<input checked="" type="radio"/>
5	明黄褐色疊混じりシルト	K-Ah混じる		
6	褐色疊混じりシルト			<input checked="" type="radio"/>
7	褐色砂疊混じりシルト			
8	明赤褐色砂疊混じりシルト			
9	黄褐色砂疊混じりシルト			
10	にぶい黄褐色シルト質砂			

P：花粉分析 PO：植物珪酸体分析

2) 分析方法

(1) 花粉分析

花粉・胞子化石は、湿重約10 gの試料についてKOH処理、重液分離 ($ZnBr_2$: 比重2.2)、HF処理、アセトトリシス処理の順に物理・化学的な処理を施して、試料から分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入し、プレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査しながら、出現する全ての種類 (Taxa) について同定・計数を行う。

(2) 植物珪酸体分析

試料中の植物珪酸体は、試料約 5 g について過酸化水素水 (H_2O_2)・塩酸 (HCl) 処理、超音波処理 (70W, 250kHz, 1分間)、沈定法、重液分離法 (ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5) の順に物理・化学処理を行って分離・濃集する。これを適度に希釈し、カバーグラス上に滴下して乾燥させる。ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下で全面を走査する。その間に、出現するイネ科葉部 (葉身と葉鞘) の葉部短細胞に由来した植物珪酸体 (以下、短細胞珪酸体と呼ぶ) および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体 (以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ) を、近藤・佐瀬 (1986) の分類に基づいて同定・計数する。なお、結果は、検出された種類 (Taxa) と検出個体数の一覧表として示す。

3) 微化石の産状

(1) 花粉化石

試料番号 4 からは、花粉化石が全く検出されなかった。一般的に花粉化石は、好気的な環境の下で酸化や土壤微生物の影響により分解・消失することが知られている。今回、花粉化石が検出されなかったのは、本遺跡が河岸段丘上に位置することを考えると、好気的な条件であったために花粉が分解・消失した可能性がある。

(2) 植物珪酸体

分析結果を表 2 に示す。試料番号 6 では、イネ科起源の植物珪酸体と樹木起源と思われる植物珪酸体がわずかに産出する。イネ科起源の植物珪酸体では、キビ族、タケ亞科、イチゴツナギ亜科などが認められる。

表 2. 植物珪酸体分析結果

種類 (Taxa)	試料番号	4	6
イネ科葉部短細胞珪酸体			
イネ族イネ属	19	—	
キビ族エノコログサ属	13	—	
キビ族 (その他)	72	1	
タケ亜科	22	14	
ヨシ属	1	—	
ウシクサ族スキ属	42	—	
イチゴツナギ亜科	17	1	
不明キビ型	137	3	
不明ヒゲシバ型	67	1	
不明ダンチク型	88	3	
イネ科葉身機動細胞珪酸体			
イネ族イネ属	2	—	
キビ族	1	—	
タケ亜科	5	—	
ウシクサ族	7	—	
シバ属	2	—	
不明	7	2	
樹木起源珪酸体			
第IIIグループ	424	28	
第IVグループ	2	—	
合計			
イネ科葉部短細胞珪酸体	478	23	
イネ科葉身機動細胞珪酸体	24	2	
樹木起源珪酸体	426	28	
検出個数	928	53	

樹木起源は、近藤・ピアスン（1981）の第IIIグループに類似する。

試料番号4では、イネ科起源の植物珪酸体と樹木起源と思われる植物珪酸体が産出する。イネ科起源の植物珪酸体では、短細胞珪酸体が多産する。この中には、栽培植物のイネ族イネ属（以下、イネ属とする）、キビ族（エノコログサ属など）、タケア科、ヨシ属、ウシクサ族（スキ属）、イチゴツナギア科などが認められる。また、樹木起源は、近藤・ピアスン（1981）の第IIIグループに類似するものと第IVグループに類似するものの2形態がみられる。

4) 遺跡周辺の古植生

堆積物中からは、花粉化石がほとんど検出されない。そのため、花粉分析結果より当時の古植生について検討することが不可能である。したがって、ここでは植物珪酸体の産状を基に本遺跡周辺の古植生について検討を行う。

試料番号6では、キビ族・タケア科・イチゴツナギア科などのイネ科草本類に由来する植物珪酸体が検出されるが、検出個体数が少ない。試料番号4は、比較的良好に植物珪酸体が検出され、イネ属・キビ族（エノコログサ属など）・タケア科・ヨシ属・ウシクサ族（スキ属）・イチゴツナギア科などのイネ科植物に由来する植物珪酸体が検出される。また、試料番号6・4とも樹木起源と推定される植物珪酸体が検出される。これは、近藤・ピアスン（1981）の分類のうち、第IIIグループと第IVグループに類似するものである。近藤・ピアスン（1981）によると、第IIIグループはブナ科・モクレン科タイサンボク・マンサク科イスノキの葉部に数多く認められ、第IVグループはツツジ科・モクレン属・シノノキ属の葉部に多く形成される。ただし、今回検出された植物珪酸体から、それを起源とする種類を判断することができない。

縄文時代前期の頃、本遺跡周辺にはキビ族・タケア科・イチゴツナギア科などのイネ科草本類が遺跡周辺に生育していた可能性がある。ただし、植物珪酸体の検出個体数が少ないとために、その詳細は不明である。一方、縄文時代中期の頃、調査地点の周辺は、キビ族（エノコログサ属など）・タケア科・ヨシ属・ウシクサ族（スキ属）・イチゴツナギア科などのイネ科植物や何らかの種類の大本類が生育していた可能性がある。なお、試料番号4からは、栽培植物とされるイネ属が検出される。本試料が採取された層位は、送付された資料で判断する限り、上位層により削除されている。さらにその上位には、現水田の床土・作土層がみられる。したがって、検出された植物珪酸体の中には、異なる時代や地域から搬入されて二次堆積したものや、後代の擾乱により上位からのイネ属の植物珪酸体が落ち込んだ可能性もある。したがって、今回の結果をもって縄文時代中期に稻作があったと判断するのは早計であろう。今後、縄文時代の人々が生活していた背景を知るために調査地点周辺の古植生について検討する場合には、地形発達過程・堆積環境を地形学的検討や珪藻分析により把握する必要がある。また、古植生を反映する微化石は、低湿地の堆積物で良好に保存される場合が

多い。そこで、同時期の低地遺跡を調査する際などに微化石分析を応用して古植生に関する資料を蓄積することが望まれる。

〈引用文献〉

- 近藤錬三・佐瀬 隆 (1986) 植物珪酸体分析、その特性と応用。第四紀研究, 25, p.31-64.
近藤錬三・ビアスン友子 (1981) 樹木葉のケイ酸体に関する研究(第2報) 双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について。帯広畜産大学研究報告, 12, p.217-229.

〈本報告書は、専門家のみを対象とするものでなく、多くの方々への啓蒙的性格を持つことにかんがみ、以下、本報告書中の用語のいくつかに若干の説明を加えることとする。〉

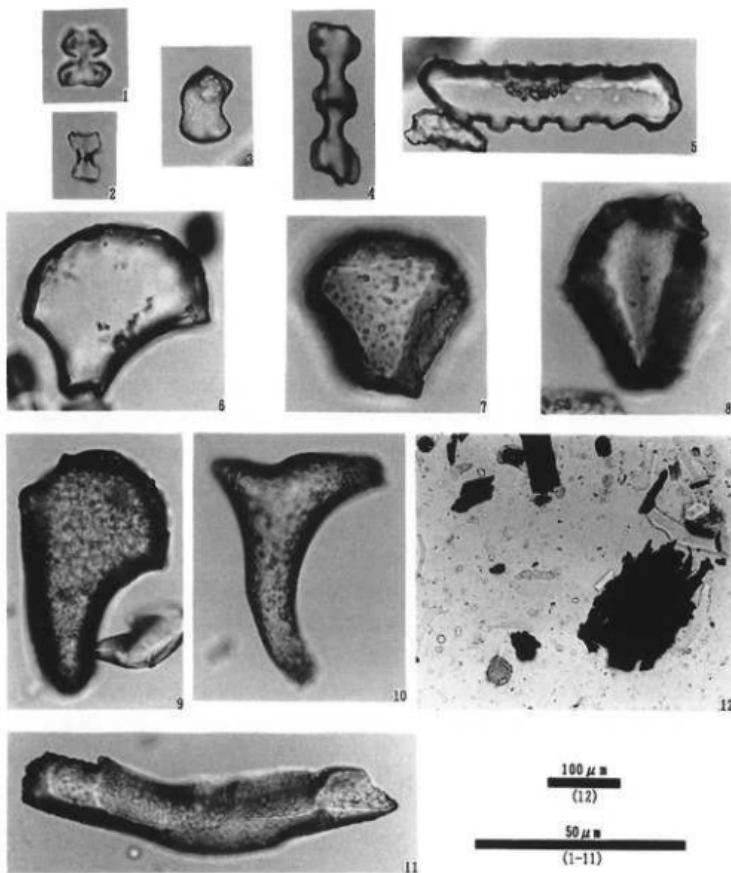
テフラ…火山の爆発的噴火による火山灰・バミス(軽石)・スコリア(岩渣)などの降下火碎物、および火碎流堆積物をいう。テフラに関する研究が活発になった理由は、爆発的噴火の性状を知る上で欠かせないばかりでなく、瞬時に広域に広がり堆積する性質を持つため、貴重な時間指標として活用されるようになってきたことにある。

K-Ah…鬼界アカホヤテフラのこと。このテフラは、南九州鬼界カルデラから約6,300年前に噴出した火山灰、バミス、スコリアなどの火碎流堆積物を指す。完新世とくに縄文時代の広域指標層として重要な役割を果している。この火山灰の給源となる鬼界カルデラは、現在、竹島と硫黄島を残してその大半が浅海底に沈んでいる。また、このテラフは陸上では九州・四国一円から本州の東北地方南部までを広くおおっている。分布面積は $2 \times 10^6 \text{ km}^2$ 以上、1,300kmの遠方でも認められる。

〈註〉今次の発掘調査において、K-Ah中よりバミス(軽石)1個を採集した。図版PL 3に示している。

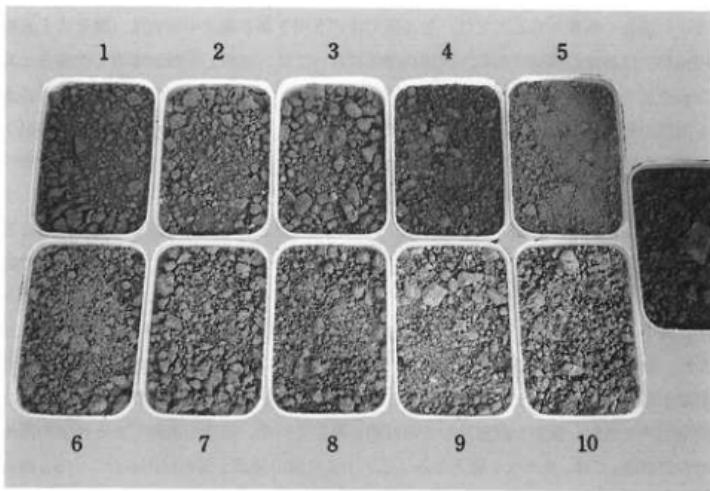
分析写真

5) 植物珪酸体・花粉分析プレパラートの状況写真



- | | |
|-----------------------------|--------------------------|
| 1. イネ属短細胞珪酸体（試料番号 4） | 2. エノコログサ属短細胞珪酸体（試料番号 4） |
| 3. タケアキ科短細胞珪酸体（試料番号 4） | 4. ススキ属短細胞珪酸体（試料番号 4） |
| 5. イチゴツナギ亞科短細胞珪酸体（試料番号 4） | 6. イネ属機動細胞珪酸体（試料番号 4） |
| 7. タケアキ科機動細胞珪酸体（試料番号 4） | 8. タケアキ科機動細胞珪酸体（試料番号 4） |
| 9. ウシクサ族機動細胞珪酸体（試料番号 4） | 10. 樹木（III）（試料番号 4） |
| 11. 樹木（IV）（試料番号 4） | |
| 12. 花粉分析プレパラートの状況写真（試料番号 4） | |

分析資料



資料No.1～No.11



一本松町郷土資料館に展示例の参考

2. 遺構・遺物に関する若干の補説

今次の調査で特筆されることは、D I 区で径約5mを測る縄文中期初頭（鷹島式土器期）の円形竪穴住居址の検出にある。四国西南部においては、従来、平城貝塚第4次調査における方形を呈する縄文後期の住居址⁶、意見の統一は見られぬものの、北宇和郡広見町岩谷遺跡の鏡柄型の敷石住居址⁶（縄文後期）等が挙げられているに過ぎない。今次の調査で検出された住居内の貯蔵穴、及び入口につらなる焼石を伴う集石遺構の在り様は、周辺での類例の集積を持って、今後の研究課題を提示したものといえる。

つぎに、以前から「音地」と呼称され、独特の橙色を呈し肉眼でも容易に見分けることができるガラス質火山灰層が、K-Ah（鬼界アカホヤ—6,300年前噴火）に由来するものであることが、科学分析によって判明した。その第5層が小礫を含むことで、攪乱を受けており、テフラ降下の最中に人跡を留めたものではなく、やや降って縄文前期末であることも判明した。しかし、南・中九州では、K-Ahの下位からは、塞^セの神、吉田、前平、石坂などの諸型式の縄文早期土器、上位から出土するもののうち、もっとも古い土器は轟式及び曾畠式といった縄文前期土器とされ、重要な鍵層としての役割を果している。近辺の遺跡である北宇和郡津島町池の岡遺跡⁶では、アカホヤ層下のスコリ亞中より塞の神式土器が検出されている。西南四国でも有用な鍵層として、今後、K-Ahの存在に注目すべきことを提示した調査であったといえよう。また、テフラに伴う軽石の検出は、発進源たる鬼界カルデラから直線距離400kmを測るこの地まで運ばれたことを物語り、その噴火の強大さに驚かされる。

さらに遺跡周辺の古植生を見るに、テフラ降下後、植生回復後の様相を試料番号4から窺うことができる。イネ属・キビ族（エノコログサ属など）・タケア科・ヨシ属・ウシクサ族（スキ属）などイネ科植物に由来する植物珪酸体が検出されている。これらの植層が、第4層（文化層）の暗褐色土層を生成させたことを知るとともに、この地の縄文中期の人々が、回復された植層の中で生活の安定が保たれていたことが知られるのである。

つぎに、検出された土器について若干の考察を試みよう。本遺跡発掘調査において最古の土器とされるものは、田井式土器であった。1950年、鎌木義昌の提唱となるこの土器は、好個の遺跡に恵まれていない。近畿の大歳山式に対比されつつも、提唱後、依然としてその性格は不鮮明で、わずかに中国山地から鳥取県崎ヶ鼻遺跡を結ぶラインからの出土報告に留まっている。今次の検出は、その分布の在り様を考える上で重要であるし、船元式土器の名で汎称される中期土器の誕生にどうかかわるかの究明からも貴重なものであるとしえよう。

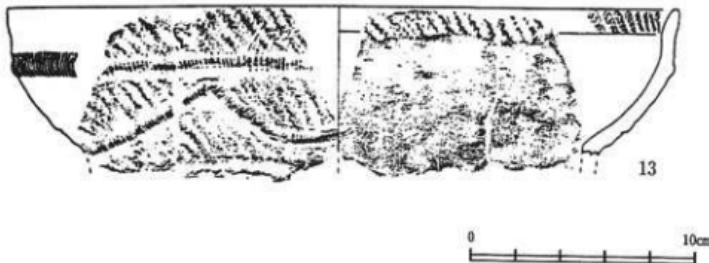
縄文中期初頭に位置づけされる鷹島式土器は、県北部の海辺遺跡の江口貝塚⁶ I区5層上部や、松山市天文遺跡第4次調査⁶でも検出されている。近隣の深泥遺跡や高知県宿毛貝塚⁶（宿毛C式土器）からも検出され、鷹島式土器が東に伸びる土器としてのみで把えることは当たらないことを物語った。優秀な海辺漁撈手段を持ったと考えられるこの集団の拡がりは、さ

らに豊後水道を南下し、南九州の春日式土器[○]を生む基盤たり得たとすら考察し得る。

また、若干の阿高系土器の存在は、この地の占める地理的位置からも十分頷けるところで
あった。今後の類例の集積が望まれよう。

いずれにせよ、今次の発掘区域は、建設省工事にかかる部分のみに限られ、さらに半分の
区域を残している。今次の発掘区域は、耕作土の入れ換えによる客土作業により、大型機械
で、恐らく繩文中期後半から後期全般にわたる文化層が削平されたと考えられ、本遺跡の全
貌を把握し得たとは云い難い。残余の区域の発掘も是非必要となる。また近隣の茶堂Ⅰ遺跡
や、県下で唯一の彦崎乙Ⅰ式土器が採集された一本松町広見遺跡[○]などの本格的調査を待って、
今次の調査で欠落した部分の究明に当たりたいものである。

挿図25 宿毛貝塚出土の宿毛C式土器



最後に、石器について若干のまとめを試みたい。

石材については、姫島産黒曜石が多数を占め、その剝片には明らかに使用痕跡が多く認め
られたことである。小剝片を木竹などに埋め込みカミソリ替刃や彫刻刀のような使用形態が
考えられるものであった。おそらく細石器の使用法が伝承されてあったものと思われる。中
には、刃厚がぶ厚く肉身を切る為よりも竹を細工する際に使用されたものと考えられるもの
もあった。これは今後の研究に期待すべき課題といえよう。

また石錐では1点大型石錐が存在したが、これは、外洋への積極的な進出がうかがえるも
のといえよう。

(土器一犬飼徹夫、石器一猪石広明)

〔註〕

- ① 木村剛朗 「平城貝塚・第IV次調査報告書」御荘町教育委員会 1982
- ② 西田・犬飼・十亀 「岩谷遺跡」岩谷遺跡発掘調査団 1979
- ③ 橋 昌信 「池の間遺跡試掘調査報告書」津島町教育委員会 1991
- ④ 宮本一夫 「江口遺跡第1次調査」愛媛大学考古学研究室 1991
- ⑤ 西尾幸則 「文京遺跡4次調査」「道後城北遺跡群」松山市埋文センター 1992
- ⑥ 山本哲也 「宿毛貝塚発掘調査報告」高知県教育委員会 1986
- ⑦ 東 和幸 「春日式土器の型式組列」「鹿児島考古」 1989
- ⑧ 木村剛朗 「愛媛県南宇和郡広見縄文遺跡」「古代文化」24巻5・6号 1972

図 版

図版 1 発掘状況

P L 1



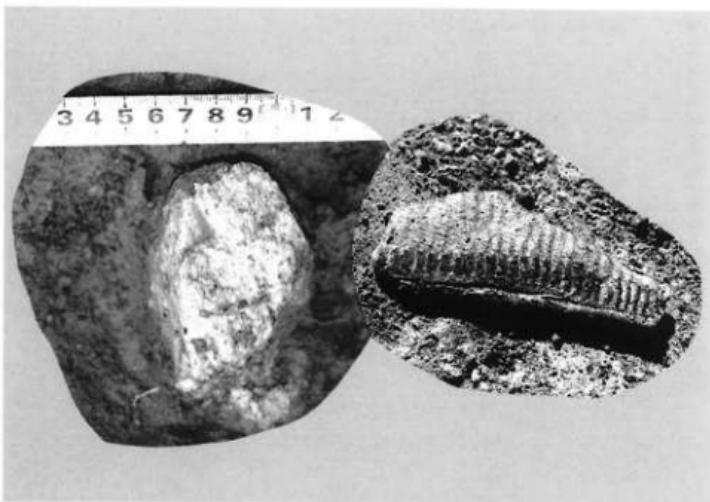
図版 2 C-4区集疊

P L 2



図版3 D-2区出土のバミス（絆石）と土器

P L 3



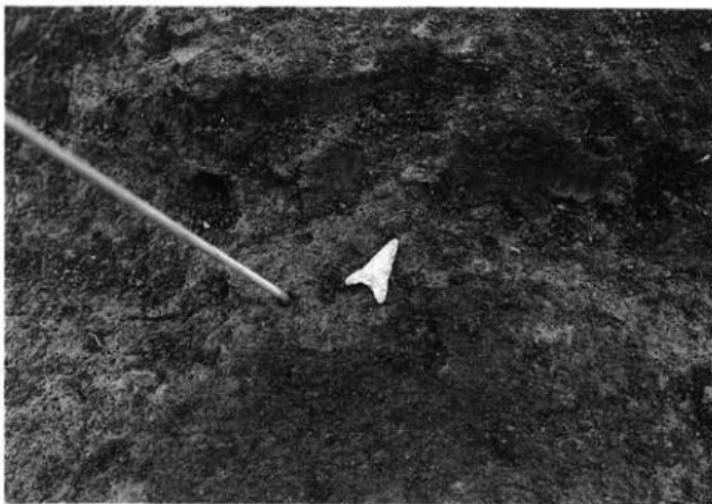
図版4 D区の発掘状況

P L 4



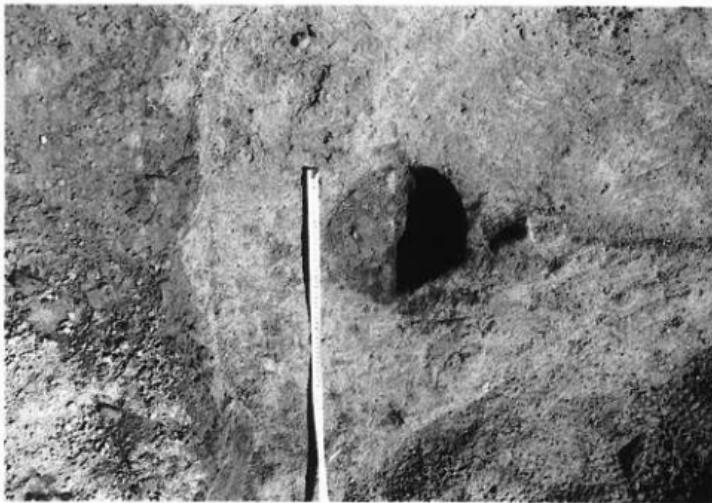
図版5 D-1区石錐の出土状況

P L 5



図版6 D-1区西側の柱穴

P L 6



図版7 D区（792番地2発掘完了）

P L 7



図版8 調査団の方々

P L 8



图版 9 D-5区堆积层序



D-5区 堆积层序

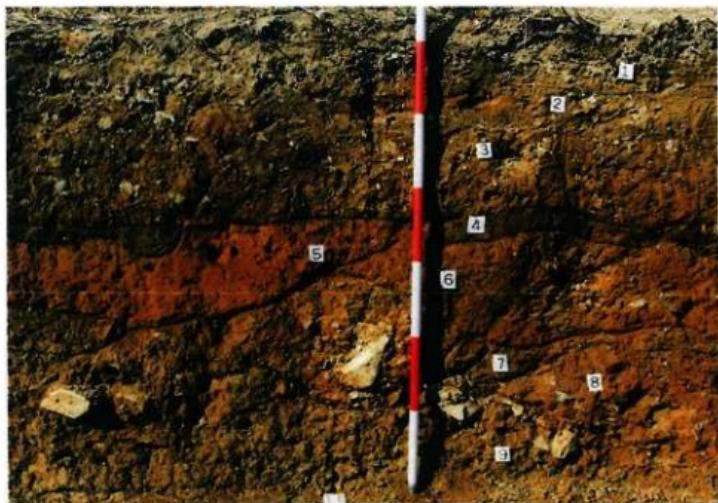
L = 600cm

D = 110cm (表土より)

W = 120cm

图版10 D-5区堆积层序 (部分)

P L 10

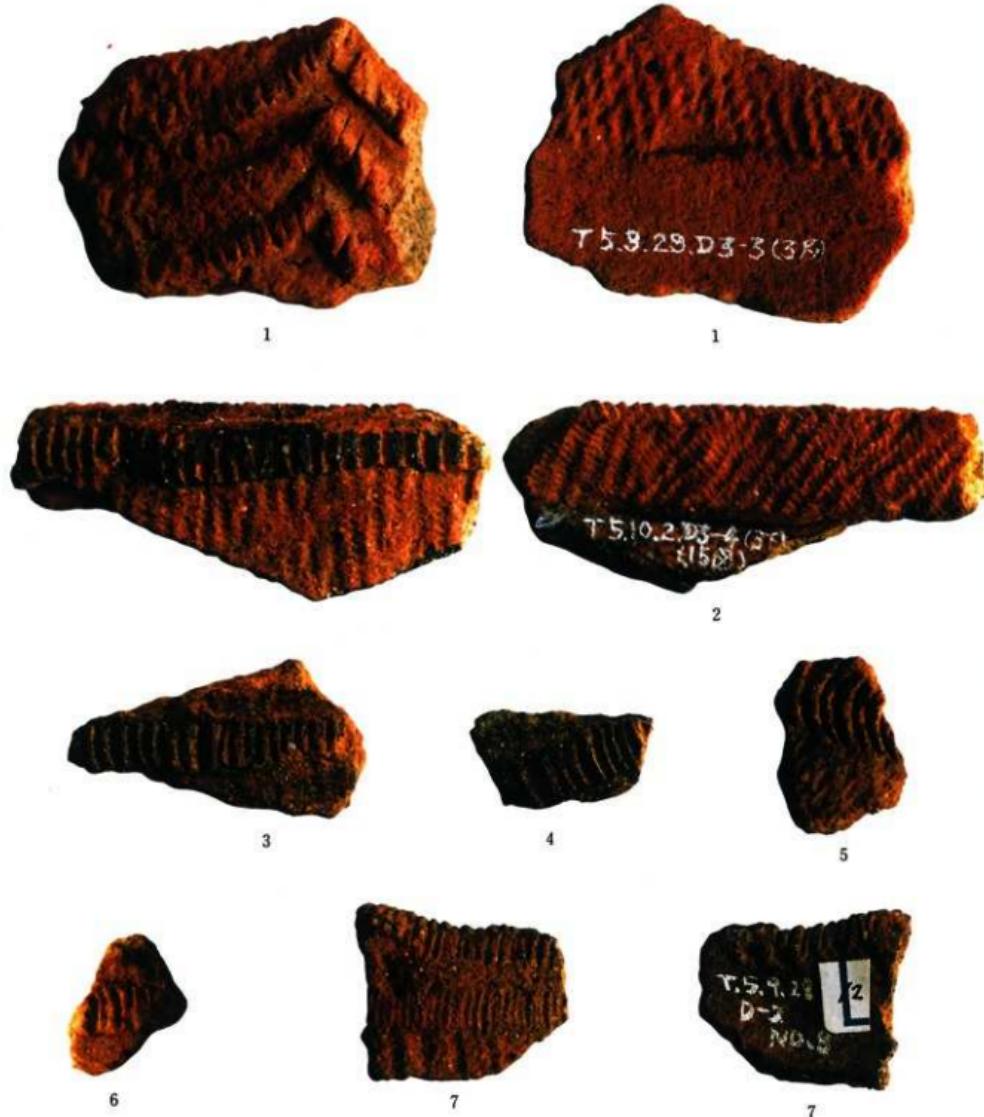


图版11 竖穴式住居址

P L 11



図版12 D区出土土器写真(1) (実物大)



図版13 D区出土土器写真(2) (実物大)



8



9



10



10



11



11



12

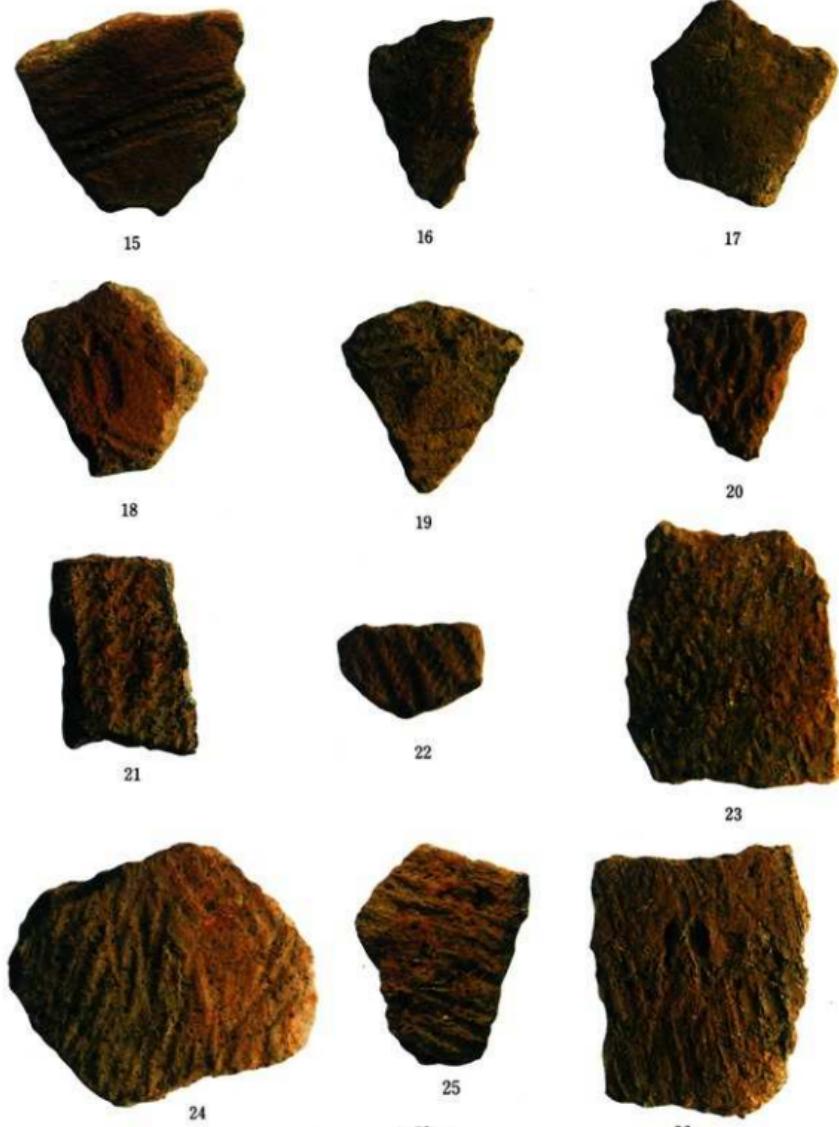


13



14

図版14 D区出土土器写真(3) (实物大)



図版15 D区出土土器写真(4) (実物大)



27



28



29



30



31

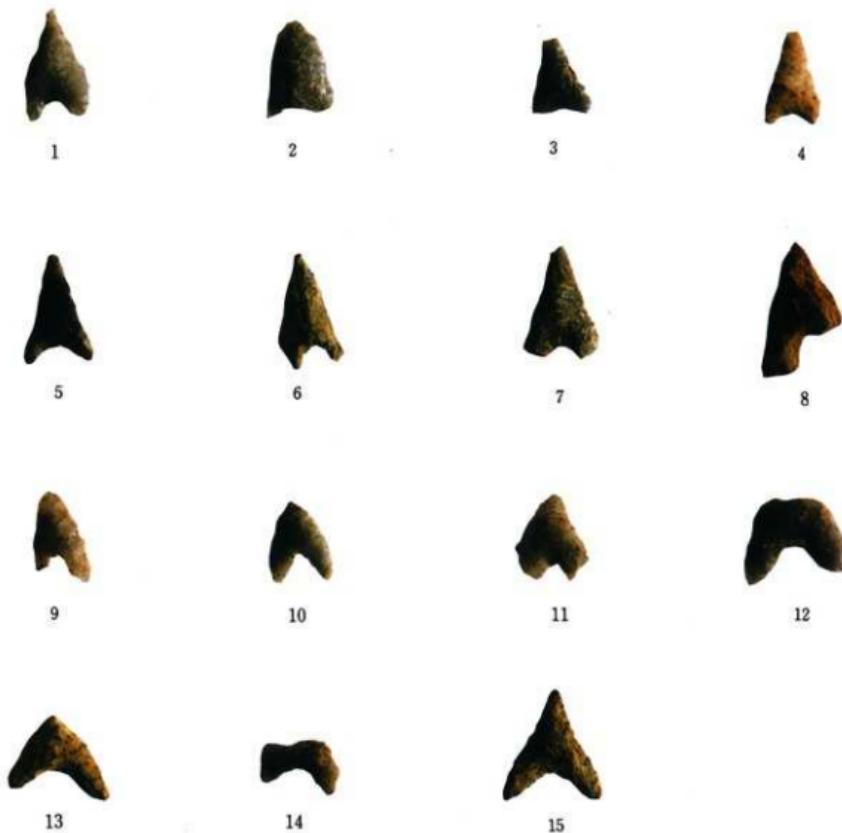


32



33

図版16 石 鐛 (实物大)



図版17 姫島産黒曜石片（実物大）



図版18 鳥島産黒曜石片・頁岩剥片（实物大）



図版19 スクレイバー・打製石斧等 (实物大)



23



21



20

図版20 石錐・敲石（实物大）



16



樹木片



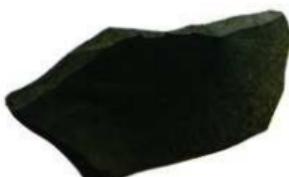
樹木片



敲石（集石4）（实物大）



17（实物大）



22（实物大）

図版21 敲石・スクレイバー



19



22 裏面 (実物 1/2)



軽石 (ハミス) (実物 1/2)



(流紋岩製)



歯骨 (右下顎骨)

图版22 加工痕有剥片 (实物大)



树木片



図版23 刺片・樹木片（实物大）



D 1 区樹木片（アカホヤ層下層）

図版24 台石・姫島産黒曜石片



図版25 姫島産黒曜石片



図版26 台石など



報告書抄録

ふりがな	なかのかわらやどうにいせきはくつちょうさばうこくしょ						
書名	中川茶堂II遺跡発掘調査報告書						
副書名							
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号	第1冊						
編著者名	犬飼徹夫、中岡修也、猪石広明						
編集機関	一本松町教育委員会						
所在地	〒798-44 愛媛県南宇和郡一本松町広見3535番地 Tel 0895-84-2211						
発行年月日	1994年6月						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村(遺跡番号)	北緯	東径	調査期間	調査面積	調査原因
ナカノカワチャドウニ イセキ 中川茶堂II遺跡	エヒメケンミナミウワ グンイッポンマツチョ ウナカノカワ 愛媛県南宇和郡 一本松町中川	38504 2	32°56'40" N	132°37'57" E	平成5年 9月2日～ 10月7日	1,344m ²	一般国道 56号線 一本松町 局部改道 改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項
中川茶堂II遺跡	散布地	縄文前、中期	円形竪穴住居址	縄文式土器(田井式、船元式) (廣島式) 石 鐵(縄文前、中期)			

一本松町文化財調査報告書 1
愛媛県南宇和郡一本松町中川

茶堂 II 遺跡発掘調査報告書

平成 6 年 6 月

発 行 一本松町教育委員会
印 刷 佐川印刷株式会社
